

# 311

● 東日本大震災

## 宮城県建設業協会の闘い4

あれから5年  
復興の先の未来へ



# 3.11

● 東日本大震災

## 宮城県建設業協会の闘い 4

あれから5年 復興の先の未来へ

あれから5年。

俺たちは地域建設業として、

精一杯がんばってきた。

そして沿岸部でも、

復興の姿が見えるようになり、

笑顔や元気が戻ってきた。

だが、既に多くのものが失われた。

人口流出、

地場産業の衰退、

観光客の激減…

元通りにはならない。

新たな地域を創造し、

存続していくには、何が必要なのか。

復興がゴールではない。

後世にわたって地域を守り、

発展させるため、

俺たちは闘い続けなければならない。



東松島市にある「かんぼの宿松島」。あれから5年が経過したが、朽ちた姿のまま残っている (2015年11月)。

東日本大震災より早いもので間もなく5年、この大震災における巨大地震及び津波によって、犠牲になられた方や被災された方、今なお避難生活や仮設住宅での生活を余儀なくされている多くの方々に、あらためて心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

んのお声掛けにより、当協会として特別協賛をさせていただき、ソフト面での支援も行ってきたところであります。

一方で、昨年9月の関東・東北豪雨災害においても、大震災からの復興事業と並行し、宮城県の指定地方公共機関の指定を受けた協会組織を挙げ、その復旧作

## 地域の安全・安心で

快適な暮らしを支える「町医者」として  
必要な危機管理産業であることを  
広報し続ける

発刊のごあいさつ

一般社団法人 宮城県建設業協会  
会長 佐藤 博俊



「集中復興期間」から「復興・創生期間」へ移行するなか、復旧・復興事業については、官民の総力を挙げた取り組みにより一歩ずつではありますが、着実に復興への歩みを進めており、被災した「石巻線」「仙石線」の鉄道の全線開通、仙台市内での「仙台うみの杜水族館」「地下鉄東西線」の開業や被災地域での「まち開き」が各所で開催される等、復興の姿が見え始めており、あらたなまちづくり等による賑わいと活況への期待がよせられております。

昨年3月には、国際的な防災戦略について議論する国連主催の国連防災世界会議が仙台市で15万人以上が参加し開催され、当協会と致しましても、東日本大震災での地域建設業の活動を風化させることなく、パブリック・フォーラム等に参画し発信して参りました。

また、ハード面での復興事業を行う建設業界ではありますが、被災者の心の笑顔を取り戻す活動として、昨年8月に久方振りで開催された大相撲仙台場所にあたっては、地元出身元力士である五城楼さ

業に取り組んで参りました。

このような状況において、震災から5年の節目として、復興の現状を地域建設業の視点でとりまとめた震災記録誌、第4弾をこのたび発刊致しました。

復興の姿が見え始めている地域もありますが、大半が復興に10年程度を要する計画であり、この大震災を風化させることなく、発信していくことが当協会の役割であることを強く認識し、今後も地域の安全・安心で快適な暮らしを支える「町医者」として必要な危機管理産業であることを広報し続けるため、真の宮城県の復興の姿が見えるまで記録誌を発刊して参りたいと考えております。

最後になりますが、大震災直後より、これまで全国の皆様方には物心ともにご支援・お励ましを賜り、衷心より御礼を申し上げますとともに、記録誌の作製にあたり第1弾よりご協力を頂きました日刊建設工業新聞社をはじめ関係各位に対しまして厚く感謝を申し上げ、ごあいさつといたします。

## 発刊に寄せて

宮城県知事 村井 嘉浩



宮城県建設業協会並びに会員の皆様には、日頃から社会資本の整備や維持管理を通じて、県民生活の向上と県勢の発展に多大なる御貢献を賜っておりますことに厚く御礼申し上げます。

未曾有の被害をもたらした東日本大震災からまもなく5年が経過いたします。改めて、震災により犠牲になられた皆様の御冥福をお祈りいたしますとともに、被災された皆様にお見舞い申し上げます。

また、貴協会をはじめ多くの皆様に、発災直後から今日まで賜りました御支援、御協力に衷心より感謝いたします。

本年は、国が定めた震災復興期間10年のうち集中復興期間5年間で3月に終了し、4月から新たに復興・創生期間がスタートします。また、「宮城県震災復興計画」においては再生期の3年目に入るなど、復興に向けた折り返しとなる重要な年を迎えます。

県内では、本年3月に三陸自動車道仙台港北ICから利府中IC間の四車線化や多賀城ICの開通、4月に東北医科薬科大学への医学部新設、7月に仙台空港の民

営化が予定されるなど、創造的復興に向けた取組が着実に実を結ぶことで、県民の皆様により一層復興を実感していただける年にしてまいりたいと考えております。

しかしながら、一方では今なお多くの皆様が応急仮設住宅などで不自由な生活を余儀なくされております。こうした皆様が、一日も早く安定した生活が送れるよう災害公営住宅の整備などに全力で取り組んで参ります。

貴協会の皆様におかれましても、これまで培われた経験や知識、技術を活かしていただき、復旧・復興の牽引役として引き続き御支援、御協力くださいますようお願い申し上げます。

今般発刊される震災記録誌は、建設業の皆様が震災からの復興に向けて取り組まれた活動の貴重な記録であり、次世代への防災意識の高揚と災害対応の指針として、大いに活用されることを期待しております。

結びに、貴協会のますますの御発展を祈念いたしまして、発刊に寄せてのあいさつといたします。

# 一般社団法人 宮城県建設業協会

昭和23(1948)年1月に宮城県土建協会として創立し、昭和25(1950)年7月に社団法人宮城県建設業協会に改組。宮城県に本社を有する約250社の地域建設業で構成される。協会本部を仙台市青葉区に置き、沿岸部に面する5支部、内陸部の4支部の計9支部で組織される。平成25(2013)年4月から一般社団法人に。

## 活動内容

国や宮城県等との「大規模災害時における応急対策業務」、口蹄疫や鳥インフルエンザへの対応として「家畜伝染病の発生時における緊急対策業務」に関する協定等を締結し、有事の際の危機管理産業として、地域及び住民の安全・安心で快適な暮らしを支える活動を展開している。

平成15(2003)年「宮城県北部連続地震」、平成20(2008)年「岩手宮城内陸地震」、平成23(2011)年「東日本大震災」、平成26(2014)年「豪雪」をはじめ、災害時にはそれら協定にもとづき、各機関の要請を受け、あるいは自主的にいち早く現場に駆けつけ、早期応急復旧に向けた対応等について組織を挙

げた活動を展開している。

そうした献身的な取り組みが評価され、平成26(2014)年3月には、宮城県から災害対策基本法に基づく「指定地方公共機関」の指定を受けた。平成27(2015)年9月「関東・東北豪雨災害」においてもいち早く出動し、決壊した河川堤防や国道の土砂崩れの応急復旧等に取り組んだ。「指定地方公共機関」として、これまで以上に地域建設業として、協会組織として、地域及び住民の安全・安心で快適な暮らしの実現に寄与するとともに、東日本大震災からの1日も早い宮城県の「創造的復興」が遂げられるよう総力を挙げて取り組んでいる。



## 東日本大震災対応

直ちに協会本部に災害対策本部を設置。県内9支部のうち、津波被害を受けた沿岸3支部には連絡が付かなかったが、会員企業は自ら被災しながらも被災現場に駆けつけ、道路啓開を開始していた。「俺たちが地域を守る」という使命感から、協会の総力を挙げて、遺体捜索や燃料・食料・衣服の提供、さらには遺体の仮埋葬、腐敗した水産加工物の処理まで、あらゆる要請に応えた。

緊急対応が終わると、崩壊したインフラや建物

の復旧・復興事業が待ち受けていたが、事業量が膨大だったため、施工までの調整・計画が整わず手待ちが長期化。人員も資材も大変窮屈な中、現場技術者は厳しい条件の下で懸命に闘い続け、協会本部も課題に直面する度に関係機関に要望活動を行うなどの後方支援を重ねてきた。1日も早い復興を望む地域の声に応えようと、現在も闘い続けている。

## 目次

ごあいさつ 宮城県建設業協会会長 佐藤 博俊	4
発刊によせて 宮城県知事 村井 嘉浩	5
宮城県建設業協会の概要と活動	6
東日本大震災の概要	10
1 復興ドキュメント 2015	
1 女川 JR石巻線が4年ぶりに全線運転	12
インタビュー 稲垣 潤一(シンガー)	20
あれから5年 女川	22
復興の先を見据えて1 佐藤 昭宏 佐藤工業(女川町)	24
濱野 和敏 佐藤工業(女川町)	27
2 東松島 JR仙石線が全線運転再開	28
復興の先を見据えて2 木村 浩章 木村土建(東松島市)	32
3 石巻 いしのまき復興マラソン	36
復興の先を見据えて3 遠藤 正樹 遠藤興業(石巻市)	40
鎌田 裕崇 遠藤興業(石巻市)	43
4 仙台 仙台うみの杜水族館がグランドオープン	46
5 岩沼 玉浦西のまちづくりと感謝の想いを伝える会	52
6 石巻 石巻川開き祭り	60
7 仙台 大相撲仙台場所	66
インタビュー 濱風親方(元五城楼)	74
復興の先を見据えて4 大槻 秀樹 阿部建設(仙台市)	76
8 仙台 地下鉄東西線が開業	79
9 気仙沼 事情を抱えた沿岸部	82
あれから5年 気仙沼	84
復興の先を見据えて5 小泉 進 気仙沼支部長、小野良組(気仙沼市)	88

2 未来を担う若手技術者	
1 寺田 知史 河北建設(仙台市)	92
2 大宮 知恵 小野良組(気仙沼市)	96
3 水戸 貴文 皆成建設(仙台市)	100
4 畑山 祐機 木村土建(東松島市)	104
5 藤森 千穂 橋本店(仙台市)	108
3 国連防災世界会議 in 仙台	
宮城県建設業協会もパブリック・フォーラム	116
あれから5年 南三陸	124
対談 阿部 隆(阿部伊組社長) VS 阿部 憲子(南三陸ホテル観洋女将)	126
4 インタビュー 復興の先の未来へ	
国土交通事務次官 徳山 日出男	136
宮城県建設業協会会長 佐藤 博俊	140
資料編	
宮城県の予算額の推移	146
宮城県への復興交付金の交付可能額の推移	146
復興まちづくり事業と災害公営住宅の整備状況の推移	148
宮城県震災復興計画と県内市町の震災復興計画策定状況	150
国全体の2016年度以降5年間の事業規模	151

# M9.0

高さ

# 19.6 m

## 1. 震災復興ドキュメント 2015

### 東日本大震災

2011年3月11日午後2時46分

震源は三陸沖(牡鹿半島の東南東130km付近)

マグニチュード9.0(宮城県北部で最大震度7)

津波浸水高は最大19.6m(南三陸町)

宮城県内の浸水面積は327km<sup>2</sup>

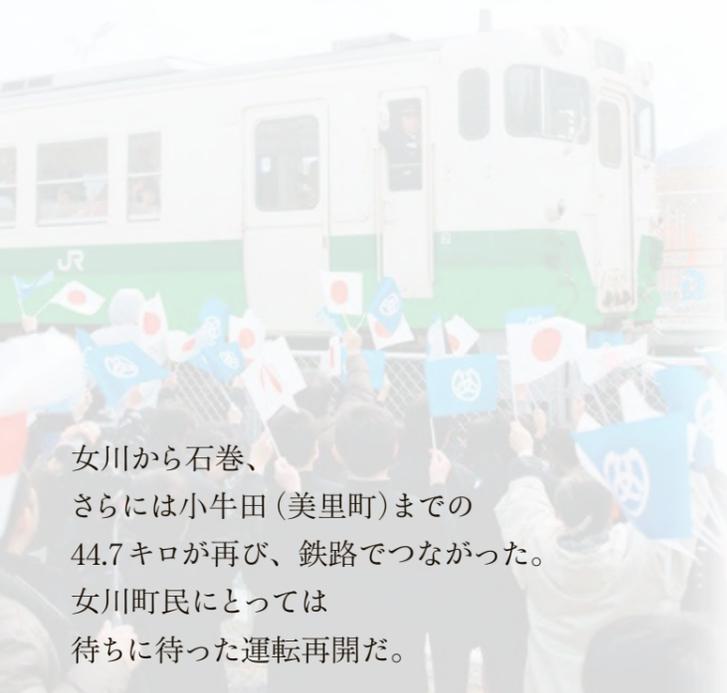
# JR石巻線が 4年ぶりに全線運転



東日本大震災で  
被害を受けたJR石巻線は、  
3月21日に  
浦宿～女川間(約2.3キロ)を  
復旧させることで、  
約4年ぶりの  
全線運転再開にこぎ着けた。



# 女川が再び、**鉄**路で



女川から石巻、さらには小牛田(美里町)までの44.7キロが再び、鉄路でつながった。女川町民にとっては待ちに待った運転再開だ。



女川駅の構内も人であふれた(2015年3月21日)。



運転を再開した線路のすぐ向こう側では、土地の造成工事が(2015年3月21日)。



内陸に移設された新女川駅。女川の復興のシンボルだ(2015年3月21日)。

# おながわ復興 まちびらき

新女川駅は、震災前より内陸に移設され、温浴施設「ゆぼっぼ」が併設された。駅から海に向かってさまざまな店舗を整備。新たなまちづくりのスタートだ。駅前では復興まちびらきの式典とイベントが開かれ、たくさんの人でにぎわった。



多くの人が見守る中でさまざまなイベントが(2015年3月21日)。



関係者でくす玉を割り開業を祝った(2015年3月21日)。



まちびらきのイベントは多くの人でにぎわった(2015年3月21日)。

# 祝おながわ復興まちびらき2015春



まちびらきの式典は、オペラ歌手の森麻季さんのコンサートで幕を開けた(2015年3月21日)。



地元の「女川潮騒太鼓轟会」も力強く和太鼓演奏を披露した(2015年3月21日)。

## 女川潮騒太鼓

まちびらきでは、  
 地元の「女川潮騒太鼓轟会」も  
 和太鼓演奏を披露した。  
 津波で太鼓がすべて水に浸かり、  
 多くのものを失いながら、  
 たくさんの方の支援を受け  
 立ち上がってきた人たちだ。  
 仙台市出身のシンガー、  
 稲垣潤一氏も女川町を通じて  
 轟会に和太鼓を寄贈していた。

## その夜は眠れずに、 ずっとニュースを見ていた

私は「みやぎびっきの会」\*のメンバーでもある。さとう宗幸さん、山寺宏一さんなど(宮城県ゆかりのアーティスト)7人で構成される。東日本大震災のあった日は午後3時から「びっきの会」のミーティングが東京都内であり、車で向かっている途中だった。尋常ではない揺れに「首都直下地震か」と思ったが、ラジオを付けると震源地は宮城とわかった。

新宿まで車を走らせたが、甲州街道の真ん中に人があふれていた。「ミーティングどころではない」と自宅に戻り、テレビを見て「ただごとではない」とわかった。果たして被災の規模はどれだけのなか。その夜は眠れずに、ずっとニュースを見ていた。

仙台には叔父と叔母がいる。連絡が付かず、沿岸部ではないので大丈夫だろうとは思っていたが、安否確認ができた時にはほっとした。

## ドラムをたたくので、 和太鼓支援を行っている

「稲垣潤一東北サポート基金」を開設したのは、私が

仙台出身なので東北を心配したファンから、「稲垣さんに支援金を送るので、直に必要としているところに、支援活動をしてくださいませんか」という問い合わせがきたからだ。ファンのみなさんに背中を押されて始めた基金だ。日々のお小遣いなどを削って支援金を送ってもらっているので、私にも責任がある。支援先は慎重に選ばせてもらっている。

「びっきの会」でも2005年から吹奏楽器のリペアをしていた。支援活動は被らない方がよい。私はドラムをたたくので、和太鼓支援を行っている。和太鼓は高額だし、学校も資金が潤沢にあるわけではない。津波で和太鼓を流された学校も多いと聞いているので、和太鼓の寄贈が増えている。和太鼓を寄贈した学校からは、お礼状もいただいている。和太鼓は使うほど音がよくなる。長く使ってもらえると幸いだ。

先日は、和太鼓グループに楽器車を寄贈した。ボランティアで小中学校に和太鼓指導に行ったり、仮設住宅でライブをしたりしている集団だ。「楽器車が廃車寸前だ」と聞いていたので、よい中古車を探していた。なかなかみつからなかったが、私の高校の同級生の紹介で格安で買うことができた。



稲垣潤一氏 シンガー、みやぎびっきの会メンバー

# 基金を立ち上げ 女川にも 和太鼓支援を実施

## 稲垣潤一東北サポート基金

ファンからの支援金やコンサート会場での募金で組成。

募金総額 約1,593万円 支援金額 約1,043万円(2015年10月31日現在)

### 主な支援実績

- 2011年6月 宮城県本吉響高等学校：楽器修理代、備品ほか
- 2012年4月 石巻市立雄勝中学校：和太鼓ほか
- 2012年8月 石巻市立湊中学校：琴、教材ほか
- 石巻市立大須中学校：笛、和太鼓ほか
- 2012年12月 女川町(女川潮騒太鼓囃会)：和太鼓ほか
- 2013年6月 亶理郡山元町立坂元中学校：部活動バス移動費
- 2015年9月 和太鼓グループ：楽器車

\*稲垣潤一公式サイト(<http://www.j-inagaki.com/>)より、宮城県内の主な支援のみ抜粋。岩手県内の学校にも和太鼓支援を行っている。

## あの景色はなくなってしまった アルバム1頁が失われてしまった

深沼(仙台市若林区荒浜)は幼いころから海水浴に行くなど、親しんでいた海岸だ。仙台市内からも車でさほど時間がかからない。震災後、最初に行った時には、松林がスカスカになっていてびっくりした。以前は松林に覆われ、海が見えないほどだった。家屋も基礎だけになっていて、ショックだった。

東日本大震災では主に東北が被災したが、当時から西の地方に行く(震災の受け止め方に)温度差があると感じていた。そんな時には、深沼の話を見せてもらった。「海水浴に行った幼いころの写真が残っている

が、あの景色はなくなってしまった。アルバム1頁が失われてしまった。そう説明するとわかってもらえる。

(仙台と石巻をつなぐ)仙石線の開通は明るいニュースだった。私の家は沿線の榴岡(仙台市宮城野区)にあったので、幼いころから家族でよく使っていた路線だ。みなさんの足になる電車が不通になっていたが、やっと開通した。

## 「心の復興」をどうやって 実現するのか 知恵を絞って乗り越えてほしい

宮城県建設業協会の震災の記録誌を見せてもらったが、建設業がこのような活動をしていたとは知らな

った。感謝しているし、このように形に残していくことは大事だ。大地震がいつくるかもしれない。備えあれば憂いなしだ。教訓として後世に何十年、何百年と残していかなければならない。

道路や堤防などがだんだんきれいに直されていくが、「心の復興」には時間がかかる。「心の復興」をどうやって実現するのか。みなさんで知恵を絞って乗り越えてほしい。被災地が全く同じ形に戻るのとは不可能だと思う。「心の復興」にどれだけかかるかわからないが、私も支援活動を続けていきたい。

東北に縁もないのに炊き出しに行ったり、支援活動をしてくれたりした人が私の周りにもたくさんいた。励まされたし、うれしかった。

(インタビューは2015年10月26日)

\*みやぎびっきの会：子どもたちを支援する一般社団法人。2005年に設立され、チャリティーコンサートによる収益を使って、小中学校の吹奏楽器のリペア代を寄付するなどの活動してきたが、東日本大震災を契機に「びっき子ども基金」を立ち上げるなどして、支援活動を拡大させた。現メンバーは、さとう宗幸、稲垣潤一、小柴大造、小川もこ、かの香織、遊佐未森、山寺宏一の各氏。

稲垣氏が支援を行った女川潮騒太鼓囃会

2011年3月



震災直後の女川町。津波で壊滅状態となった。

「女川は流されたのではない。  
新しい女川に生まれ変わるんだ。  
人々は負けずに待ち続ける。  
新しい女川に住む喜びを感じるために」

(作：佐藤 柚希 君)



2枚の写真の撮影ポイントとなった、女川町地域医療センター(2015年11月19日)。

2015年11月



同じ場所から見た女川町。復興は道半ばだ。

# あれから5年 女川

女川のまちは津波で壊滅状態に。  
およそ5年が経過しても復興は道半ばだが、  
人口が流出しないうちに、  
やりとげなければならない。  
女川町地域医療センターには、  
地元の小学生が書いた詩の一部が横断幕に。



女川には  
にぎわいのある  
まちになってほしい。  
人口は震災前から  
減少傾向にあったが、  
震災後は  
さらに加速したようだ。  
せっかくよいまちができて、  
人がいないのではさみしい。

### 佐藤工業（女川町） 佐藤 昭宏 氏

佐藤工業専務。離島工事をしている時に震災が発生。会社とも家族とも連絡が取れず、不安を抱えながら翌日、船で戻ると女川の町は壊滅状態に。会社は本社も工事部の建物も津波で使えなくなり、小さなプレハブ建物を拠点に道路啓開やがれき処理の仕事に奔走した。女川町出身。

# 復興の 先を見据えて

## 壊滅

あの日、女川町の沖合にある出島いずしまで工事をしていた。水道管がつながり、やれやれという時に地震が発生した。島の人たちが学校に避難してきたので、水や発電機、暖房などを準備して一晩を過ごした。社員10名、協力会社の関係者15名が一緒だった。

次の日、船で戻ると女川の町は壊滅状態だった。会社に残っていた社員はどうなったのか。本社は海の近くなのでダメだろうと思ったので、清水地区に

あった工事部の建物に向かったが、何もない状態だった。ライトバンが「くの字」に曲がっていた。

避難所となっていた女川町総合体育館に向かうと2名の社員がいて、社長以外の安否は確認できた。実はその時、社長は既に役所との打ち合わせを終え、道路啓開に入るために各社に指示を出そうと動き出していた。3月12日午後から重機で国道398号のがれき撤去を開始。町役場と病院、避難所をつなぎ、車1台が通れるようにした。

## がれき処理

女川町の宮城県建設業協会の会員企業は、田中建設と当社の2社のみだ。会員企業ではないが女川町内企業である高橋建設、神田建設、オナガワを加えた5社が中心となり、女川地区の緊急対応にあたった。まず、やったのがれきの撤去だ。自衛隊、大手ゼネコン、地域建設会社が連携し、町役場で1日3回の打ち合わせを重ねながら作業にあたった。

道路啓開が一段落すると、町内の平らな土地はすべてがれきの仮置き場となり、復興どころではなくなってしまった。女川町は海岸線からすぐ山になるため、平らな土地があまりない。がれきを片付けようということで、5社で「女川町瓦礫処理協議会」を立ち上げ、当社の濱野和敏営業部長が会長に就いた。



震災後のがれき処理の状況。

## 復旧工事

災害復旧ではまず、地盤沈下に伴い防波堤や護岸が低くなり、海象の影響を受けやすくなってしまったため、土地のかさ上げ工事を行った。道路、港湾施設、漁港施設の復旧工事も行った。時間とともに仕事の中身が変化していった。かなりの個所があり、現在も復旧工事を行っている。

また、当社の特徴として離島工事が多いのだが、震災後は起重機船や運搬船が不足し、手配に苦心した。復旧工事を行ったのは、主に出島と江島えのしまだが、江島の方が沖合にあり、海象の影響を受けやすく工事がやりにくい。震災後に当社は、離島と女川町の両方の復旧工事を手掛けたということだ。



女川町の復興工事の状況（2015年11月19日）。

## 離島工事

出島の島内道路は震災前から手掛けていて、2015年度内に完成する。離島工事は海象に左右され、せつかく作業の段取りをしても波、風、霧の影響で船を出せず、作業が中止になることもある。日没が早くなると、早い時間に戻らなければならないので作業時間が取れない。生コンやアスファルトを使って施工する時には、材料、機械の手配という条件が加わる。震災前に比べ、今でも材料や労務の調達は大変窮屈で、工程が左右される。

離島工事は震災以降、敬遠される傾向にある。協力会社も資材メーカーも本土にたくさん仕事がある

## にぎわい

女川駅の前にすてきなまち並みができてきた。後は新しい国道が整備され、女川駅の脇で造成している場所に住宅や町役場などの公共施設が建っていくはずだ。ほかの地域に比べると女川の復興は進んでいると感じるが、住民は「もっと早くしてほしい」と思っているようだ。災害公営住宅の完成を待っているお年寄りが多い。

地区によっては、戸建て住宅を建て始めているところもあるが、待ちきれずによそに移転してしまう

ので、わざわざ離島に行きたがらない。リスクもあるし、コストもかかる。当社の離島工事の割合は全体の30~40%だ。震災前はずっと多かった。会社としてずっと離島地域に根付いてきたからこそ、現在も復旧工事にきちんと対応しようと考えている。社員や協力会社は離島まで毎日通って作業を行う。利幅も厳しいが、自分たちが守ってきた地域だという意識が強い。



女川駅から海に向かって伸びる商店街のまち並み(2015年10月20日)。

人も多い。仮設住宅に入っている人がまだ、残っている。その人たちが自分の家や災害公営住宅に入らないと、復興は終わらないと思う。

当社も高台移転のための造成工事をしている。これまで7カ所で造成工事を手掛けていて、出島では住宅が完成して人が住んでいる。

女川にはにぎわいのあるまちになってほしい。人口は震災前から減少傾向にあったが、震災後はさらに加速したようだ。せつかくよいまちができて、人がいないのではさみしい。

## 決意

これまで培った技術と経験を生かし、地域に貢献できる企業でありたい。復興工事が終われば仕事量も減少するはずなので、状況を見据えていきたい。2~3年後には仕事量がかくんと減るのではないかと。社員には、安全第一でがんばってほしい。

(インタビューは2015年11月19日)



小さい会社だけで、ほかの地区よりも早くがれき処理を終えることができた。

佐藤工業(女川町) **濱野 和敏** 氏

佐藤工業営業部長。「女川町瓦礫処理協議会」の会長として、地域の建設会社だけでがれき処理をやり遂げた。その効率的処理は地域の復旧に大きく貢献し、土木学会の特別表彰を受けた。女川町出身。

## 瓦礫処理協議会

女川町では、東日本大震災で約44万4,000トンもの震災廃棄物が発生し、町内の清水地区と伊勢地区の仮置き場に集められた。「女川町瓦礫処理協議会」ではまず、仮置き場で会員各社に一次処理をやってもらった。協議会の構成メンバーは田中建設、高橋建設、神田建設、オナガワに当社を加えた5社。いずれも女川町の地域建設業者だ。

現場をエリア分けして、各社が競争するような形で一次処理を進めてもらった。木くずや廃プラスチック、紙・布類、家電、粗大物、危険物・有害物など、大まかな選別処理をここで行った。

## 特別表彰

初めて廃棄物を出荷したのは2011年12月だ。試験的に東京の大田、品川清掃工場の焼却施設に運んだ。私は協議会の会長として、ずっと現場に張り付いていた。東京都からはごみ処理の専門家がきてアドバイスしてくれた。燃えないものについては、随時、リサイクル業者や専門業者に処分してもらった。がれき処理には2年程度を要した。

「瓦礫処理協議会」は有効に機能した。土木学会の特別表彰を受け、2015年3月に仙台市で開催された国連防災世界会議のシンポジウムの中で授賞式が行われた。

地元の会社だけで、がれき処理を行ったのは珍し

女川町が日本水産の跡地に中間処理施設をつくったので、仮置き場である程度選別した廃棄物を中間処理施設で完全に選別した。分別処理の手法は協議会で提案したが、効率よく処理するための手選別ライン、土砂分離処理、精選別ラインなどの機構や配置は、当社の佐藤吉宏社長が考え出した。

中間処理施設で選別したもののうち、燃えるものは東京都の焼却施設に運び出して焼却処分してもらった。大きなものは細かく破碎。木材が80%、廃プラスチックが14%、布類が6%と、燃焼効率を考慮して決められた配合通りに廃棄物を出荷した。コンテナに積み込み鉄道で運んだが、随時、放射能を測定する必要もあった。

かったからだと思う。小さい会社だけで、ほかの地区よりも早くがれき処理を終えることができた。震災当時は、見学者もひっきりなしにきた。

(インタビューは2015年11月19日)



効率的にがれき処理を行う中間処理場の手選別ライン。



鎮魂の花壇の下で復興工事が(2015年11月19日)。



仙石線の開通を喜ぶ地域の人たち (2015年5月30日)。



仙台と石巻をつなぐJR仙石線が  
全線運転を再開した。  
高城町駅 (松島町)  
～陸前小野駅 (東松島市) 間10.5キロが  
不通となっていたが、  
東松島では高台移転に併せ、  
線路の一部を内陸側に移設。  
新たな野蒜駅と東名駅が整備された。

復興ドキュメント2 東松島 2015年5月30日

# JR仙石線が全線運 転再開



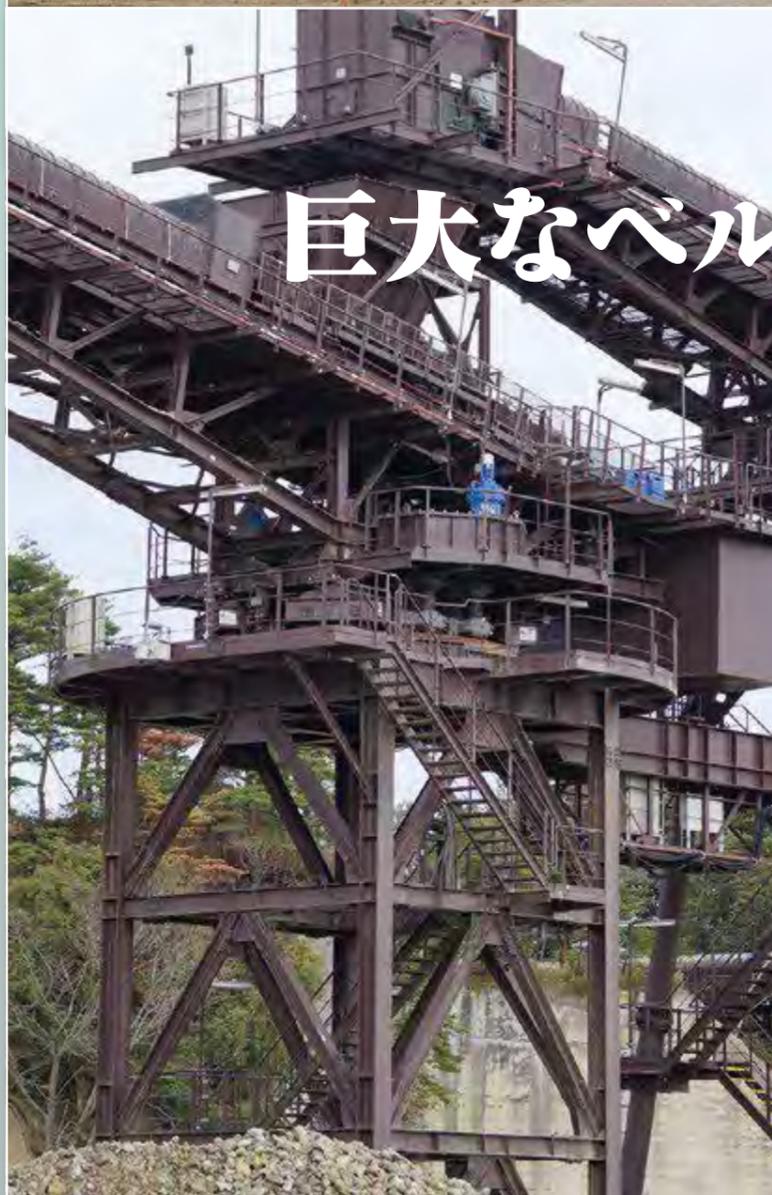
新たに整備された野蒜駅に入ってくる電車 (2015年5月30日)。



本日、どういったあいさつをしようかと考えた時に、お礼の言葉しかないと思った。内々の計算では、(仙石線の全線運転再開は)10カ月ほど先の予定だったが、3年前の4月に(事業の)覚書を結ぶ時に、半年程度は詰まりそうだということになり、最終的にはさらに4カ月短縮することができた。JR東日本の技術力に加え、UR(都市再生機構)や(事業に携わった)関連企業がベルトコンベヤーを採用したことによる時間短縮と、東松島市民の用地への協力が連携し、今日を迎えることができた。市民を代表してお礼を申し上げたい。

# 野蒜駅で記念式典

阿部秀保東松島市長がお礼のあいさつ



# 巨大なベルトコンベヤーを採用し事業期間短縮

JR仙石線が不通になり、地域の人々は不自由を強いられてきたが、関係者の努力で当初の見通しより約10カ月も前倒しで全線運転が再開された。推進力になったのは、巨大なベルトコンベヤーの採用だ。1日に1万6,500トンもの土砂搬出が可能になり、鉄道用地を優先して造成することができた。



東松島地域の復興はこれからだ。  
被災された方の生活はまだ、  
元に戻っていない。  
スポーツをする子が  
ものすごく減っている。  
小学校単位でチームを組めない。  
人口が流出しているのに加え、  
(各家庭に)子どもを  
チームに預ける余裕が  
なくなっているのだと思う。

木村土建(東松島市) **木村 浩章** 氏

木村土建社長。津波被害が甚大だった東松島市では、決壊した河川を締め切るため大量の土のう(トンパック)が必要に。宮城県の要請を受け1万2,000体もの大型土のうを作製したことも。震災時は常務だったが、2014年9月に社長へ。東松島市出身。

# 復興の 先を見据えて2

## 復旧本格化

東松島市では、かさ上げや防潮堤などの河川関係工事の発注がピークを迎え、本格的に動き出したところだ。土地造成の工事はほぼ終了し、(高台移転のための住宅の)建築工事もスタートした。震災で被害を受けた野蒜小学校の建築工事も始まった。宮戸小学校と統合され「宮野森小学校」として生まれ変わる。2016年12月完成予定であり、仮設校舎に入学した1年生が6年生となりやっと本校舎で卒業式を迎えることができる。ほかにも、C・W・ニコルさんが「森の学校」づくりを進めている。

当社も宮城県発注の「定川河川災害復旧工事」などをJVで受注したほか、震災直後の応急復旧から手掛けてきた野蒜から宮戸島に渡る「松ヶ島橋橋架換工事(下部工)」も行っている。ほかに河川の堤防工事もやっているところだ。

東松島市ではがれきの片付けから始まり、応急復

旧を経て、本復旧が始まったところなので、忙しさは続きそうだ。宮城県からJVで受注した災害復旧工事も工期が2018年3月までなので、まだ2年半近くある。東松島市の関係では、「今後の防災」という意味での復興道路の仕事も始まる。東松島市では多重防御を実現するため、防潮堤があり、復旧させた運河の第二堤防があり、さらに第三堤防として復興道路を整備する計画だ。当社も復興道路の工事を1本受注させてもらった。



野蒜海岸の堤防工事。多重防御の第一堤防となる(2015年11月20日)。

ではあるが、復興の形が見えてきたのではないかな。反面、仮設住宅に住んでいる人もまだいる。集団移転のための造成工事は終わったが、野蒜駅近くの高台に整備する市内最大の災害公営住宅も工事発注はこれからだ。最も早く事業が進んだ造成地でも、新築住宅の引き渡しがやっと終わったところだ。

## 仙石線開通

5月末に仙石線が全線開通したが、東松島地域の子どもたちにとってよかった。石巻には私立高校がないので、東松島から仙台市内の学校に通っている子もいる。震災の影響で仙石線の東松島区間が不通になり、多くの子どもたちがバスで通学していた。電車でも一度、開通区間の駅までバスへの乗り換えが必要となり、通学に1時間半から2時間もかかっていた。

震災を経験した東松島地域の人たちも、少しずつ



全線開通した仙石線の野蒜駅で下車する人々(2015年5月30日)。

## これまで

当社では震災直後、地域住民や社員とその家族を社内の会議棟に受け入れた。最大20人程度はいたと思う。津波で自宅を流されるなど甚大な水害が発生したため、早い人で1カ月、長い人で3カ月は会議棟にいた。

この5年を振り返ると、常々、「震災復興のために」と思ってやってきたので、私自身が「しんどい」と感じたことはあまりない。ただ、人手不足や技術者不足で「現場に負担をかけている」という思いはあ

る。不足は解消されつつあるが、現場の社員は大変だったと思う。

震災後、津波で壊れた松ヶ島橋の撤去を急ぐ必要がある、日本に3台しかない650トン吊りの大型油圧クレーンを持ってきて、一気に橋桁を吊り上げたことがある。当時、私は常務だったが、「少しでも早く」ということで工事部長と相談して決断した。コストがかかるが、地域のために急がなければならないし、工期が延びれば経費もかさむ。トータルで考えて大型油圧クレーンの採用を決断した。

## 東松島の復興

東松島地域の復興はこれからだ。被災された方の生活はまだ、元に戻っていない。また、私の子どもは野球をしているのだが、石巻地区でスポーツをする子がものすごく減っている。野球もサッカーもメンバーが激減し、小学校単位でチームを組めない状況だ。地域から人口が流出しているのに加え、(各家庭に)子どもをチームに預ける余裕がなくなっているのだと思う。

私は東松島で生まれ育った。東松島市には4万2,000人程度の人口があったが、現在は4万人ちよっ



大型油圧クレーンを採用した松ヶ島橋の撤去工事(2013年3月7日)。

とだ。震災で亡くなった方は1,109人いて、約1,000人が市外へ移転。宮城県は仙台一極集中となる傾向が強いが、地域の力は大事だ。人口流出を止めるためにも、魅力ある東松島市づくりに貢献していきたい。

建設業の役割も重要だし、農業、漁業をいかに盛り上げていくかも地域にとって必要だ。私は宮城県建設業青年会の活動もしていて、ボランティア活動や清掃活動、各小学校への防犯用語の入ったクリアファイル寄贈なども行っている。東松島市商工会の活動もしているが、(他産業と連携した)具体的活動はまだない。

## 決意

復興が終われば建設業の仕事は少なくなっていくと思うが、インフラの維持管理の仕事はあるはずだ。建設業も担い手が不足している。多能工や直営労務者をなるべく地域で補いながら、担い手を確保したい。地域に必要な産業であることをアピールしながら、生き残っていくことのできる業種でありたい。

(インタビューは2015年11月20日)



野蒜駅前で大鼓を披露する子どもたち(2015年5月30日)。



野蒜小学校跡地での石巻地区広域消防音楽隊の演奏(2015年5月30日)。

# 津波被害を受けた野蒜小学校でも

津波が押し寄せ、大きな被害を受けた野蒜小学校。移転後の跡地で、仙石線全線開通のイベントが行われた。野蒜小学校は、宮戸小学校と統合され、宮野森小学校として生まれ変わる。東松島の本格的な復興はこれからだ。



野蒜駅に隣接して土地の造成工事が(2015年5月30日)。

# 元気いっぱい 「いしのまき復興マラソン」

スポーツで復興を盛り上げようと、  
「第1回いしのまき復興マラソン」が、  
石巻市総合運動公園で行われた。

6月27日は  
あいにくの雨と風の中でのレースとなったが、  
たくさんの市民ランナーや子どもたちが  
元気いっぱいにコースを駆け抜けた。



子どもからお年寄りまで、多くのランナーが参加した(2015年6月27日)。



雨にも風にも負けずにスタートを切る参加者(2015年6月27日)。

# 風雨のレースの後に 聖火台の除幕・点火式

雨と風はやむことがないまま、レース後に  
東京の国立競技場から移設した  
聖火台の除幕・点火式が行われた。  
宮城県薦土工業連合会の若鷲会による  
木遣りと梯子乗りが披露され、  
アテネ五輪ハンマー投げ金メダリストの  
室伏広治氏が聖火台に点火した。



トップでゴールを切る参加者  
(2015年6月27日)。

# 遠藤興業が 台座の製作・設置などを無償で

聖火台は、「復興のシンボル」として  
2019年3月まで石巻に貸し出される。  
当初は費用のめどが立たなかったが、  
地域のために聖火台の運搬、  
および台座の製作・設置工事を  
無償で引き受けたのは、  
遠藤興業(石巻市)だ。  
軟弱な地盤条件を克服し、  
台座を製作して  
聖火台を据え付けた。



聖火台は円錐形状でバランスが悪いだけに、台座に据え付けるにも慎重な作業が必要に(2015年6月18日)。



亀山石巻市長から賞状を受け取る子どもたち  
(2015年6月27日)。



室伏広治氏による聖火台点火  
(2015年6月27日)。



若鷲会による梯子乗り(2015年6月27日)。



室伏氏を囲む遠藤興業と若鷲会の関係者(2015年6月27日)。



聖火台の  
除幕・点火式が行われた。  
あいにくの大雨と強風だったが、  
点火した瞬間は  
胸にぐっとくるものがあった。  
点火前に披露した  
宮城県鳶土工業連合会・  
若鳶会の梯子乗りも、  
「(天候が悪いので)中止にします」  
とは言えない状況だった。

遠藤興業(石巻市) **遠藤 正樹** 氏

遠藤興業社長。石巻の復興の象徴として、聖火台誘致への支援を決断。地域のために聖火台の運搬、台座の製作・設置工事を無償で引き受けた。完成後の聖火台の除幕・点火式では、激しい風雨の中で木遣りと梯子乗りも披露した。2015年7月から宮城県鳶土工業連合会会長も務める。仙台市出身。

# 復興の 先を見据えて

## 聖火台誘致

石巻に「東京オリンピック・パラリンピック聖火リレー出発地・聖火台誘致委員会」を立ち上げる上で、最大の懸念事項は予算の確保だった。当時はまだ、震災復興もままならぬ状況だったため、石巻市も石巻市教育委員会も誘致には難色を示していた。だが、当社の会長も「復興のシンボルが石巻にあればよい。戦後日本の復興を支え、東京五輪やアジア大会で使用された聖火台が石巻にくるなら、被災者にとっても嬉しい」という考えだった。

このため2013年10月に遠藤興業として、「聖火台

## 設置工事

聖火台の台座を設置する石巻市総合運動公園は二つの川に挟まれた軟弱地盤で、当時、石巻では「震度6強の余震がある」とも言われていた。その場所で、3~4メートルの高所に3トン近い重量物を載せなければならない。しかも聖火台は円錐形状のため重心が高く、転倒の危険もあった。厳しい条件に耐え得る構造物をつくらなければならない。

問題解決に向け、まず、重量2.3トンのコンクリートブロックを80個も現地に置いて圧密をかけ、事前に地盤の沈下を促進させることにした。だが、困っ

## デザイン

費用がかかったのは、当初に比べ台座のグレードも上がったからだ。「どうせやるなら、とことんまで」という当社の会長の考えもあり、台座の型枠に宮城県産の杉材を使用することにした。台座のコンクリート表面に杉の木目が浮き出る。在日フランス大使館で採用されたのと同じ工法だ。宮城県産の木材をアピールするとともに、地域の材木店にも復興支援を担ってもらったかった。

台座のデザインは、日本の伝統文化でもある五徳をイメージした。正面から見ると台座の足が丸く抜けていて、「すべてが丸く収まるように」という願いを込めた。

の設置費用を負担し、台座を無償で製作・提供する」という表明書を石巻市体育協会および石巻市に提出した。誘致委員会が動き出し、さまざまな誘致活動の結果、2014年9月に石巻への聖火台貸し出しが発表された。

国立競技場での聖火台の撤去は、日本スポーツ振興センター(JSC)から別の建設会社に発注済みだった。だが、誰が聖火台を石巻まで運ぶのかが不明確だったので、「当社で東京まで取りに行っても構わない」と追加表明した。聖火台が搬送されたのは12月8日だ。朝7時に国立競技場を出て、14時30分に石巻に到着した。

たことに、地下水位が高いため地盤が隆起する日もあり、落ち着くまでに100日間の転圧が必要になった。本来なら、杭でも打たなければ施工できない場所だ。台座の工事だけで多額の費用がかかった。



専用の吊り具を独自に製作し、台座に据え付た(2015年6月18日)。

## 除幕・点火式

2015年6月27日に聖火台の除幕・点火式が行われた。あいにくの大雨と強風だったが、点火した瞬間は胸にぐっとくるものがあった。点火前に披露した宮城県農工工業連合会・若鷺会の梯子乗りも、「(天候が悪いので)中止にします」とは言えない状況だった。静岡からきてくれた女性の乗り子も、「私は大丈夫です。上がります」と言ってくれた。

あの火を見て、点火役を務めてくれた(アテネ五輪ハンマー投げ金メダリストの)室伏広治さんも感激していた。話だけで終わる可能性もあった聖火台の誘致だ。あの日、室伏さんは日本選手権を欠場してまで、石巻に駆けつけてくれたと聞いている。



多くの人の努力で誘致された聖火台に復興の火がともった(2015年6月27日)。

## 決意

震災からこれまではあつという間だった。夢中でやってきたので、大変だったという思いはない。石巻を支えてきた地域建設業者として、地域の復興に向けた仕事をやり続けるしかない。みんなが普通の生活に戻るまでは、何としてもやらなければならない。

(インタビューは2015年8月17日)



風雨の中での見事な梯子乗り(2015年6月27日)。

## 地域への思い

遠藤興業として、聖火台の誘致活動や台座の製作をやってよかった。最初は他社に声を掛けても賛同を得られなかった。震災から1年半から2年目のできごとだ。スポーツが復興支援になるのか、リスクもある聖火台を被災地に持ってくるのがよいことなのか、判断がつかなかったのだろう。今思うと、(誘致活動や台座の製作は)当社でしかできなかった。

## 将来

石巻はがれきが片付き、復興が始まったばかりだ。地域の人たちも戻ってきていないし、仮設住宅に入っている人もいる。これからが心配だ。

当社としては、住宅建設用地の造成に力を注いでいる。防災集団移転促進事業に関連し牡鹿半島部、沿岸部、内陸部など5カ所で造成工事をやらせてもらっている。1日も早く自宅を再建できる用地を確保してあげないと、再建をあきらめてしまう。都市型(共同で住む)災害復興住宅を増やすのではなく、自主再建のための戸建て住宅を取り戻し、元の生活に戻れるようにしてあげるのが地方都市・石巻流だ。



梯子乗りを見守る遠藤社長(左、2015年6月27日)。

## 聖火台という モニュメントを活用しながら、 「石巻の“心の復興”」を 進めてほしい。

### 遠藤興業(石巻市) 鎌田 裕崇 氏

遠藤興業取締役営業部長。聖火台の除幕・点火式に駆け付けてくれた室伏広治氏とは15年来の友人という。熱い思いで誘致に尽力してくれた室伏氏に対し、「復興とは何かを見つめ直しながら、地域建設業者としてできる限りのことをしなければならないという思いをかき立てられた」と話す。



## 誘致

「国立競技場が解体されるのであれば、復興の象徴として聖火台を石巻に貸してもらえないか」と、石巻市体育協会をはじめ有志で誘致活動をスタートさせた。「正式団体として陳情してほしい」と言われ、誘致委員会を立ち上げることになったが、石巻市体育協会はNPO法人だ。石巻商工会議所の力を借りることになり、浅野亨会頭に委員長をお願いし、2014年2月、石巻に「東京オリ

ピック・パラリンピック聖火リレー出発地・聖火台誘致委員会」が発足した。

4月には東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の森喜朗会長に、5月には下村博文文部科学大臣(当時)に誘致活動を行った。併せて、当社で設計した台座のパースを日本スポーツ振興センター(JSC)に示すなどの準備表明も実施。全国8カ所から誘致があったが、石巻への聖火台の貸し出しが決まった。

## 運搬

別の建設会社が聖火台を撤去して梱包していたが、当初の梱包では道路運送車両法の規格外になってしまうことがわかった。各都道府県の道路の使用許可も必要になる。JSCに伝えたところ、梱包をやり直して10トントラックに積めるようにしてくれた。

だが、なかなか運搬のゴーサインが出ない。聖火台に財産権が設定されていて、賃貸借契約書で保険

をかける必要があったからだ。費用負担をめぐり協議が長引き、石巻に搬送されたのは2014年12月8日だ。

梱包材を含めると重量は5トン近かったため、聖火台の荷下ろしには重機が必要だった。復興支援に配慮して、当社で全て行うのではなく、地元の南光運輸(石巻市)にも協力してもらい、石巻市総合運動公園の倉庫に聖火台を保管した。

## 地域建設業

当社は地域建設業者であり、地域の公共団体などに仕事をいただいている。誘致活動はマスコミにもあまりPRしていない。市民は、当社が台座を寄贈した事実をほぼ知らない。唯一、企業として活動した証として、聖火台の下に小さな記念碑を置かせてもらった。台座のイメージの説明に加え、当社が設計・施工を担ったことだけが書いてある。既に寄贈したものであり、台座は市民のものだ。

## 心の復興

聖火台の誘致は、石巻市体育協会の伊藤和男会長の念願だった。心からの復興支援だ。聖火台というモニュメントを活用しながら、「石巻の“心の復興”」を進めてほしい。国立競技場では高いところにあった聖火台を、間近に見ることができる。多くの方が被災地・石巻を訪れる目的にしてほしい。間近で記念撮影ができるのは2019年3月までだ。

(インタビューは2015年8月17日)



東京五輪で使われた  
聖火台を製作したのは、  
埼玉県川口市の鋳物師、  
鈴木萬之助、文吾親子だ。

引き受け手がなく、  
製作期間3カ月という状況で、  
職人の心意気で製作を引き受けた。  
昼夜兼行で作業に没頭したが、  
鉄を鋳型に流し込む作業がうまくいかず、  
精根尽きた萬之助さんが他界。  
文吾さんが志を引き継ぎ納期に間に合わせた。

## 職人の魂が こもった聖火台

職人の魂のこもった聖火台が、  
今度は石巻で  
被災地の「復興のシンボル」としての  
役割を果たす。

# 仙台うみの杜水族館が グランドオープン

津波被害を受けた

マリニピア松島水族館(松島町)は、  
全国の水族館の支援で営業を再開したものの、  
老朽化などもあって2015年5月10日に閉館。  
88年の歴史に幕を閉じた。

松島水族館から多くの生き物に移り、  
新たにオープンしたのが  
「仙台うみの杜水族館」(仙台市宮城野区)だ。  
地域の人々にとっては  
震災からの「復興を象徴する水族館」だ。



# 荒川静香さんが テープカット

7月1日に行われた  
オープニングセレモニーには、  
地元仙台市出身で、  
トリノ五輪フィギュアスケート金メダリストの  
荒川静香さんが出席。  
村井嘉浩宮城県知事、  
奥山恵美子仙台市長らとともに  
テープカットを行った。



テープカットをする荒川静香さん(右から5人目)。イルカもジャンプで開業を祝った(2015年7月1日)。



荒川さんに「イナパワー」を披露するアシカ(2015年7月1日)。



# 美しく神秘的な大水槽

入場してすぐの大水槽は、まるで三陸の海を切り抜いたような美しさだ。イワシの群れが織りなす神秘的な世界に、大人も子どもも足を止めて見入ってしまう。メジナやイサキ、ガザミの姿も。

思わず足を止めて見入ってしまう大水槽 (2015年11月21日)。



海を再現したビーチも (2015年9月26日)。



巨大なマンボウの姿も (2015年11月21日)。



# 玉浦西のまちづくりと 感謝の想いを伝える会

甚大な津波被害を受けた岩沼市。  
被災した六つの集落の  
防災集団移転先となったのは、  
玉浦西地区だ。  
まちづくり検討委員会を設置し、  
住民がまちづくりに参加することで、  
昔ながらのコミュニティーを再生。  
そのまちづくりの経験と感謝の想いを伝える会が  
岩沼市民会館で開かれた。

## 玉浦西地区のあゆみ

- 2011年11月 2日 移転先を玉浦西地区に決定
- 2012年 6月11日 まちづくり検討委員会を設置  
(計28回開催)
- 2012年 8月15日 造成工事に着工
- 2013年11月25日 まちづくり検討委員会が最終報告書
- 2013年12月21日 宅地の引き渡しを開始(第1期)
- 2014年 4月16日 災害公営住宅の建設工事に着工
- 2015年 3月25日 災害公営住宅の建設工事が完了

約20ヘクタールの田んぼを造成し、まちづくりを進めた玉浦西地区(2015年7月19日)。



玉浦西地区にかかわったたくさんの人が集まり、「まちづくりと感謝の想いを伝える会」が開かれた(2015年7月19日)。

# まちづくりにかかわって来た人たちが想いを

“関心があったのは、玉浦に住む子どもたちをまちづくりにどう参画させるかだ。地域の重要な構成員であり、検討した結果、中学校には四つの公園の名称を考えてもらった。小学校には樹木の名称の木札を作って、立てかけてもらった”

加藤敬三さん(玉浦西地区まちづくり検討委員会委員)

“みなさんの表情が変わってきたと思ったのは、個別の家の土地をどこにするか、どんな形にするかを検討してからだ。自分の家をどういう形で建てるかを考え始めた瞬間に、未来が見えてきて、表情も和らいだのではないか”

柳谷吉紀さん(兵庫県伊丹市職員・元派遣職員)

“前向きに生きていけると感じたのは、自宅が再建の方向に進んできたことだった。土地の引き渡しから1週間後には地鎮祭を行った。図面を見ただけでうれしかった。建築中も毎日のように家族それぞれが見に行き、わくわくした気分だった”

斉藤洋子さん(玉浦西地区まちづくり検討委員会委員)

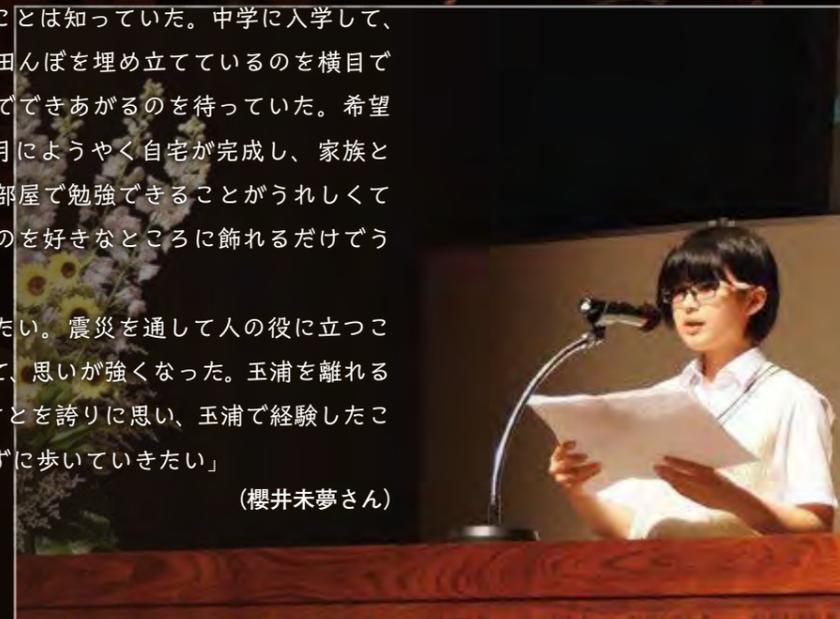
「仮設住宅に3年間暮らした。住めるだけで感謝しなければならないのに、現実を受け入れられない自分がいた。床はきしみ、夏は暑く、冬は寒く、隣の声も聞こえる。『家に帰りた。こんなところ嫌だ』。頭の中は不満で一杯だった。私だけでなくみんなが気を使って生活し、ストレスがたまっていたと思う。

玉浦西地区ができることは知っていた。中学に入学して、休日に自転車で通り、田んぼを埋め立てているのを横目で見、一日千秋の思いでできあがるのを待っていた。希望の光だった。今年の4月ようやく自宅が完成し、家族と暮らしている。自分の部屋で勉強できることがうれしくてたまらない。自分のものを好きなところに飾れるだけでうれしい。

将来は看護師になりたい。震災を通して人の役に立つことのすばらしさを感じて、思いが強くなった。玉浦を離れることがあっても、ふるさとを誇りに思い、玉浦で経験したこと、学んだことを忘れずに歩いていきたい」

(櫻井未夢さん)

まちづくりと感謝の想いを伝える会では、玉浦西地区にかかわってきたまちづくり検討委員会委員や他県から岩沼市に派遣された元職員らが、これまでのまちづくりや支援に対する感謝の想いを話した。また、地域を代表して、玉浦中学校3年の櫻井未夢さんが「感謝のことば」を述べた。





記念碑の除幕式。俳優の西村雅彦氏(左から3人目)も駆けつけてくれた(2015年7月19日)。

# 想いは未来へ

## 記念碑除幕式

玉浦西地区の現地で  
記念碑の除幕式もあり、  
「いわぬま健幸大使」を務める  
俳優の西村雅彦氏も出席した。  
記念碑には、  
「数え切れない教訓や支援に対する  
感謝の心を未来に引き継ぎ、  
そして、『玉浦西』に集った人々の『想い』が  
未来に届くことを願い、  
ここに、この碑を刻む」の文字が。

※いわぬま健幸大使：岩沼市の復興状況のPRや、まちづくりに関する助言などを行ってもらうため、各分野の人々を委嘱している。



記念碑のタイトルは、「想いは未来へ」(2015年7月19日)。

## 菊地啓夫岩沼市長が 除幕式であいさつ



「私も玉浦生まれだ。かつては玉浦村があったが、市町村合併で岩沼町となって以降、玉浦という正式名称はなくなった。今回、あらためて玉浦西というまちができたことをうれしく思う。大事なのは、魂を入れたコミュニティをつくることだ。新しい玉浦のコミュニティをつくっていきたい」



# まち開き感謝祭

岩沼小学校金管バンドの演奏 (2015年7月19日)。



子ども神輿が玉浦西地区を練り歩いた (2015年7月19日)。



元気いっぱいソーラン節を披露した (2015年7月19日)。



熊野神社の神楽も披露された (2015年7月19日)。

玉浦西地区で  
まち開き感謝祭が開かれた。  
この日は台風一過の真夏日。  
イベントとして子ども神輿や  
ソーラン節、  
岩沼小学校金管バンドの  
演奏が行われ、  
会場ではおにぎりや芋煮などの  
おもてなしも。

# 石巻川開き祭り 夕刻から灯籠流しが



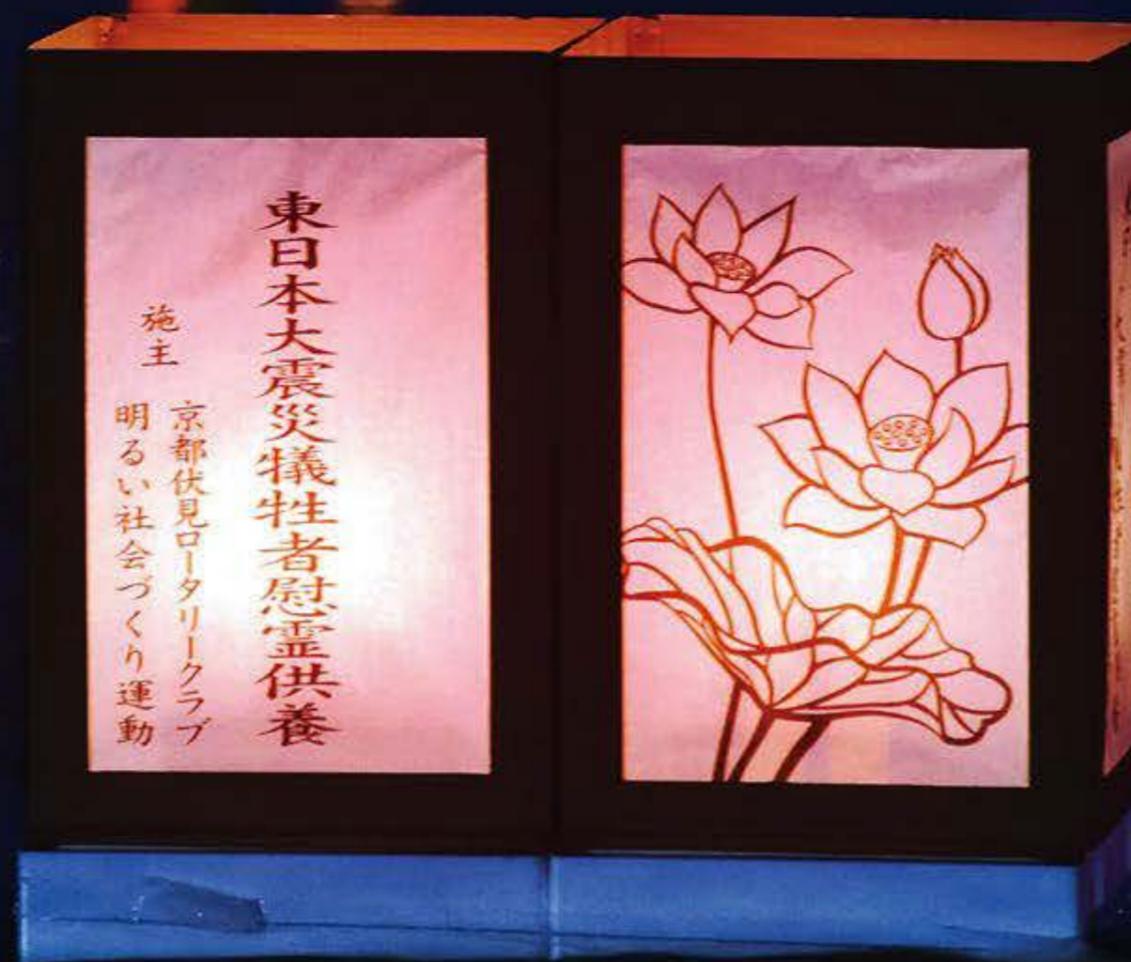
川沿いに地域の人が集まり、灯籠を見送った(2015年7月31日)。

夏の風物詩である「石巻川開き祭り」は、治水で石巻を救った川村孫兵衛への感謝のまつりとして大正時代にスタートし、今回が92回目。旧北上川では孫兵衛船競漕などのイベントが行われ、7月31日には夕刻から灯籠流しが。

船の上から、たくさんの灯籠が川面に下ろされた(2015年7月31日)。

# 鎮魂 復興への祈りを込めて

津波がさかのぼった川だ。  
あの日、あれほど荒れ狂い、  
多くの犠牲者を出した川面を、  
静かに灯籠が流れていく。  
復興への祈りを込めて、  
海へと帰っていく。  
花火も打ち上げられ、  
石巻の夜空を美しく染めた。





さまざまな思いをのせて灯籠が流れていく (2015年7月31日)。

# 灯籠の数だけ悲しみが

震災の犠牲者をしのび、  
約5,000個の灯籠が旧北上川に。  
灯籠の数だけ悲しみがある。

# 新北上大橋早期供用の理由



新北上川にも津波は遡上し、河口から4キロ上流に架かる新北上大橋も通行不能に。2011年10月に通行できるようにしたのは、遠藤興業(石巻市)だ。予定より1カ月半も早い。震災直後の厳しい状況で、なぜ、そんなことができたのか。



## 4時間のシフト制で連続作業

「宮城県東部土木事務所から『新北上大橋をつないでくれ』と相談があった。地元の建設会社として引くに引けない。橋梁の架設工事には重量鳶の作業が多いが、当社の会長も社長も専門だ。重量鳶の専門会社として県にアドバイスをし、受注できるかもわからなかったが、タイムロスがなくすため資機材の調達準備にも入っていた。これが工期を短縮できた最大の理由だ」。

「受注後は、不眠不休の体制を採らざるを得なかったが、

労働基準法の問題もある。鳶を3班に分け、午前10時と午後3時の休憩、お昼の休憩もなくして1日4時間のシフト制を敷いた。早朝、昼間、夕刻で4時間ごとに交代させながら連続作業ができるようにした。機械オペレーターも2勤制にした。機械と人が休まずにフル稼働できるようになり、役所が定める稼働時間をフル活用して工期の短縮に努めた。休日も日曜日も関係なしだ」。

(遠藤興業：鎌田裕崇氏)

# 大相撲 仙台場所 満員御禮 7,000人

2015年8月16日、  
大相撲仙台場所が開催された。  
仙台での大相撲は7年ぶり。  
東日本大震災後は初めてとあって、  
お年寄りや家族連れなどが早朝から駆けつけ、  
約7,000人の満員御礼となった。

# みんなが笑顔、元気に

力士と間近に触れあえるのは、  
地方巡業ならではの楽しみだ。  
朝の稽古を見たり、ちゃんこを味わったり。  
子どもからお年寄りまで、  
笑顔につつまれ元気をもらった。



普段は見ることのできない朝稽古の風景(2015年8月16日)。



力士が独特の節回しで歌い上げる相撲甚句(2015年8月16日)。



開場すると、すぐに人気力士との握手会が(2015年8月16日)。



禁じ手を面白おかしく紹介する初切。髷をつかんではいけない(2015年8月16日)。



取組前に行われたちびっこ相撲では、地元の子どもたちが、小さな体にまわしを締め、人気力士に向かっていく。ユーモアたっぷりに子どもたちを相手にする力士の優しさと、子どもたちの微笑ましい姿に、会場に笑顔が広がった。

まわしを締めたちびっこ力士の微笑ましい姿に、会場は大いに沸いた(2015年8月16日)。

# 地元の子どもたちが ちびっ子相撲



力士との対戦は、子どもたちにとって忘れられない思い出になったことだろう(2015年8月16日)。



多くの人の努力で実現した仙台場所 (2015年8月16日)。

# 建設業界もバックアップ

多くの人の努力で実現した仙台場所だ。地元出身の元力士として、開催に奔走した濱風親方(元五城楼)は東北高校出身。同校の大槻秀樹理事長は、阿部建設社長でもある。同社が東北高校をバックアップする形で、仙台場所に特別協賛した。地域を元気づけようと宮城県建設業協会も特別協賛した。



幕内力士の土俵入り (2015年8月16日)。



横綱の土俵入りには大歓声 (2015年8月16日)。



特別協賛した宮城県建設業協会の横断幕も場内に (2015年8月16日)。



## 後援会を通じて 義援金を集めるなど、 自分のできる範囲で被災地支援を

震災時には両国国技館にいた。尋常ではない揺れだった。私は子どものころに宮城県沖地震を経験している。実家は内陸部の愛子(仙台市青葉区)にあるので、津波の心配はないと思ったが、あれだけの地震だ。家がつぶれているのではないかと心配した。夕刻になって無事を確認できた。

東北自動車道が復旧した次の日、車を運転して仙台に向かった。高速道路のサービスエリアではガソリンを入れる車が長蛇の列だった。実家近くのコンビニには商品が何もなかった。

その後、日本相撲協会として力士と石巻市などに炊き出しに行ったが、沿岸部の被害はすごかった。震災前の写真も見せてもらったが、全く違う状況だった。後援会を通じて義援金を集めるなど、自分のできる範囲で被災地支援をやらせてもらった。

## 夢や希望を感じてもらうとともに 義援金を集め、 復興の役に立てれば

私は仙台市出身で、現役中は地元のみなさんに応援してもらった。自分に何ができるかを考え、被災地の1人でも多くの方に笑顔になってほしいと、2015年8月16日に仙台場所を開くことにした。相撲を見て夢や希望を感じてもらうとともに義援金を集め、復興の役に立てればよいと思った。

地方巡業は相撲協会として行うのではない。地域の自治体や企業が興行権を買い、チケットをさばいて運営する。今回の主催は仙台場所実行委員会、ぴあ、河北新報社、仙台放送だ。私も初めて、相撲を取る側から(地方巡業を)主催する側に回ったが、チケット収入だけではお金が回らない。地元の名士や企業に協力していただく必要があり、宮城県建設業協会に特別協賛をお願いした。あいさつに行き趣旨を話すと、快く協力してくれた。

濱風親方 元五城楼、日本相撲協会事業部

# 仙台場所開催に 奔走した 地元出身の元力士



## 目的は相撲の普及と 発展であり、 子どもたちとの触れあいや 育成も大切だ

仙台場所当日は早朝から多くの方が並んでくれた。やる事が多くて大変だったが、たくさんの方が笑顔になってよかった。「もし、地震が発生したら」と心配もしたが、けがをする人もなく無事に終わった。

家族できてくれた方もいたし、年配の方も多かった。力士の体に触れたり、力士に赤ちゃんを抱っこしてもらったり、地方巡業には本場所と違った魅力がある。力士の稽古も地方巡業でしか見ることができない。取組までの間には土俵入りやちびっこ相撲もある。相撲協会からすれば、地方巡業の目的は相撲の普及と発展であり、子どもたちとの触れあいや育成も大切だ。

今回も子どもたちを招待してちびっこ相撲を行ったが、みんなが喜んでくれた。子どもたちに相撲に興味を持ってほしい。私も指導者になったので、仙台出身の力士を育ててみたい。十両以上に仙台出身の力士がいれば、仙台場所の盛り上がりも違ってくる。

## 来年も仙台場所を開く つもりだ。 震災を風化させてはならない

10月1日には宮城県の村井知事を表敬訪問し、義援金を渡した。義援金は仙台場所の目的の一つでもあったので、集めることができてよかった。来年も仙台場所を開くつもりだ。震災を風化させてはならない。来年は2日間を予定していて、もっとたくさん子どもたちと接する企画を立てたい。

仙台市内は震災以前と変わらないが、石巻など沿岸部に行くのが残っている。ああいうところをきちんと復興させなければならない。いずれ、仙台場所を3~4日間の日程でやれるようになれば、1日は沿岸部に行って何かを企画する余裕もできるはずだ。

## 力士が仙台にきて 地域の活性化になり、 義援金などの形で 協力していければ

宮城県建設業協会のみなさんに被災地をどう復興していくべきかを聞



仙台場所のパムフレット

いた。私は相撲協会の人間で立場が違うが、共感できる部分はある。仙台場所を開くにあたり、地元の名士のパーティーに出席させてもらう機会があり、新たな縁ができた。被災地の復興に向け、まだまだ協力できることはある。横の広がりや輪ができて、いろいろな形で協力していければよい。

被災地を復興していくために宮城県建設業協会の力は必要だ。宮城県、さらには東北のためにがんばってほしい。私は相撲界の人間なので、相撲を通じてしか恩返しができないが、毎年、仙台場所を開き、被災地の方にもっともっと笑顔になってほしい。力士が仙台にきて地域の活性化になり、義援金などの形で協力していければよいと思う。

(インタビューは2015年10月5日)。



十両力士の土俵入り。



バックアップする形で  
仙台場所に  
特別協賛をさせていただいた。  
濱風親方は、  
「来年も仙台場所を  
2日間の日程で開きたい」という。  
「来年は義援金を倍にしたい」と  
一生懸命だ。  
できる限りの応援は  
させていただきたい。

阿部建設(仙台市) **大槻 秀樹** 氏

阿部建設社長。建設会社として復旧・復興事業に取り組む一方、仙台青葉ロータリークラブの元会長としてボランティア活動に奔走。仙台市荒浜の松林を復興させようと、松の苗木を地元の小学校に育ててもらい、みんなで植樹したことも。国内外のロータリークラブから寄せられた心からの支援を被災地域に届ける役割を果たした。東北高校理事長も務める。仙台市出身。

# 復興の 先を見据えて4

## 被災者支援

震災から約1週間後に、所属する「仙台青葉ロータリークラブ」のメンバーと女川町を視察する機会があった。御前浜<sup>おんまえはま</sup>という集落があり、お寺にたくさんの人が避難し、ぎゅうぎゅう詰め<sup>ぎゅうぎゅう</sup>で1週間も寝泊まりしていた。地域の人たちが、公民館として使われていた旧小学校の建物を住める状態にしようとしていたが、人手も物資もない。すぐ会社に戻って対策を講じ、建物を直すお手伝いをさせてもらった。「流れてきた冷蔵庫の中身を食べていた」と聞き、食糧支援もさせていただいた。

次に、「御前浜の人たちにお風呂に入っていたらこう」という話になった。ロータリークラブのメンバーである、作並温泉の岩松旅館(仙台市青葉区)に電話でお願いすると、快く引き受けてくれた。だが、

## これまで

当社は建築工事が主体だ。会社では夜遅くまで全社員が血眼になって働き、建物の修繕や清掃に奮闘していた。その後、建物の解体工事の仕事が出てきた。それから半年程度が経過して、災害公営住宅などの復興の仕事に入るわけだが、困ったのは資材や労務が不足し、価格が高騰して手配がつかなかったことだ。

学校関係の仕事も数えられないほど、やらせていただいた。南光台小学校(仙台市泉区)は(1978年の)宮城県沖地震でも被害を受け、その時に直さなかった部分がすべて壊れた。解体して建て直したが、そ

「湯を沸かす重油がない」という。すぐにメンバーの横のつながりで重油を集め、届けることができた。

女川から約300人をバスでピストン輸送した。後に亶理町からも(入浴の)依頼がきたので、バスを手配した。福島から仙台市戦災復興記念館(仙台市青葉区)に避難してきていた人たちも、岩松旅館に向かっていた。さまざまな入浴施設が営業を再開するまでの間だが、総勢600人くらいにお風呂に入らせていただくことができた。みなさん、とても喜んでくれた。



女川の御前浜でのボランティア活動(2011年3月29日)。

の工事がやっと去年、終わったところだ。

当社は亶理町のお客様が多い。亶理町の小中学校のほとんどを手掛けていたので、その修繕もしたし、崩れ落ちた町役場の対策もやらせていただいた。まずは亶理町で生活ができる状況をつくり、次に仕事の間というので、いちご団地の集荷場の工事も当社でやらせていただいた。



阿部建設が阿部工務店(亶理町)とのJVで建て替えた亶理町立荒浜中学校(2014年10月16日)。

## 仙台場所

大相撲仙台場所の開催に奔走した濱風親方(元五城楼)は、私が理事長を務める東北高校の柔道部員だった。東北高校をメインに出し、阿部建設がバックアップする形で仙台場所に特別協賛をさせていただいた。

濱風親方は、「来年も仙台場所を2日間の日程で開きたい」という。仙台場所で集めた義援金を宮城県に渡すことができたが、「来年は義援金を倍にしたい」と一生懸命だ。できる限りの応援はさせていただきたい。

仙台場所では、7,000枚のチケットがあつという間に売り切れた。開催当日も、きていただいた方の笑顔が全く違った。仙台市界外の方が多かったと思うが、被災した沿岸部の方も招待できればよい。



2016年は2日間の日程で仙台場所を開くという(2015年8月16日)。

## 地域の産業

これからは地域に根ざした産業を元に戻す作業が大切になるだろう。亙理町であれば「はらこ飯」だ。阿武隈川が汚染されたため、荒浜で捕れたサケは使えなかったが、使用できるようになった。お寿司屋さんやはらこ飯屋さんが、再び荒浜に店を出そうという動きが出ている。

亙理町にある国民保養センター「鳥の海荘」もようやく改修された。震災後は護岸工事を行う大手ゼネコンの作業員宿舎になっていた。お風呂とレストランのみの営業で、宿泊はできないが、この施設が復活すれば地域が活性化してくるのではないかな。



多くの人が笑顔になった大相撲仙台場所(2015年8月16日)。

## 高止まり

建築の仕事量は昨年がピークで、今年から競争が激化している。資材の値段は落ち着いてきたが、鉄筋工、型枠工、とび、内装関係の人工費が高止まりしている。当社では低コストのマンション事業を展開しているが、(建築費の)坪単価が倍に跳ね上がり、事業として成り立たなくなってしまった。生コンの値段も高止まりしている。

需要と供給のバランスなので、しょうがないとは思いますが、適正なレベルでの価格の安定が望まれる。それまで、お客様にも設備投資を待っていただいている。公共工事であれば(資材価格や労務費の変動に合わせて)工事価格を変更してもらえませんが、民間工事はそうはいかない。

## 信頼

これから建築分野に関しては、大変な時代がくると思う。2016年はまだ仕事があるが、2017年になると仕事が半分になる。

生き延びるために必要なのは、我々、建築屋にとっては民間の仕事だ。民需を拡大していくしかない。信頼を得るためには、中央の建設会社と地域の建設会社の違いを明確にすることだ。お客様にきめ細かい対応を心掛けることが大切だと思う。

(インタビューは2015年11月20日)

# 地下鉄東西線 が開業

地下鉄南北線に続き、  
仙台市で2本目となる  
地下鉄東西線が2015年12月6日、  
いよいよ開業した。  
八木山動物公園駅～荒井駅間の  
13.9キロをつなぐ。



地下鉄東西線を高架部から見下ろす人々(2015年1月10日)。



整備中の国際センター駅(2015年3月17日)。



待望の開業を前にまち中にもお知らせが(2015年3月17日)。

地下鉄東西線路線図



# 13駅でさまざまな開業イベント

地下鉄東西線では13駅が整備され、開業を祝うイベントが各駅で行われた。始点・終点となる荒井駅(仙台市若林区)では、マンモスの「わらアート」も登場した。



マンモスの「わらアート」の前に、テープカットが行われた(2015年12月6日)。



開業した荒井駅(2015年12月6日)。



開業日には切符売場も多くの人で混雑した(2015年12月6日)。

# 事情を抱えた沿岸部

大きな津波被害を受けた気仙沼市も、復興へ事情を抱えた地域だ。防潮堤の高さや土地相続の問題などもあり、土地の造成やかさ上げに着手できずにいたが、ようやくまちの復興の姿が見えてきた。



鹿折地区の復興工事の状況(2015年10月28日)。



鹿折地区では、宅地を3.2メートルまでかさ上げる(2015年10月28日)。



気仙沼漁港では5.0メートルの防潮堤が計画されている(2015年10月28日)。



復興工事が行われている気仙沼漁港には多くの建機が。気仙沼大島に向かうフェリーが後ろを横切っていく(2015年10月28日)。

84 2012年10月

# あれから5年 気仙沼

津波で大型漁船  
「第18共徳丸」が乗り上げた  
気仙沼市の鹿折地区。  
2013年秋に船が解体され、  
現地は大きく様変わりしたものの、  
復興にはまだ時間がかかりそうだ。

2015年10月

津波で大型漁船が乗り上げた鹿折地区。



海沿いの商港地区には、海拔7.2メートルもの防潮堤が姿を表した(2015年10月28日)。



同じ場所から見た鹿折地区。周囲は、かさ上げなどの工事が全盛だ。

# 真の復興を遂げるには、 地域建設業は何を…



地域建設業として、新たな役割を模索する必要がある(2015年10月28日)。



気仙沼市内では、たくさんの場所でかさ上げ工事が(2015年10月28日)。



気仙沼漁港の朝の風景(2015年10月28日)。

気仙沼は漁業のまちだ。  
漁業が復活しない限り、  
気仙沼が真の復興を  
遂げたことにはならない。  
そのために地域建設業は  
何をしなければならぬのか。  
「地域の町医者」として  
機能し続けるには  
何が必要なのか。  
新たな役割を  
模索する必要がある。



建設業から見た  
まちづくりがあるはずなので、  
積極的に提案していきたい。  
それにはまず、  
地域における建設業の役割を  
認識してもらうことだ。  
「建設業や小野良組は、  
まちのためにやっているよな」  
と思ってもらわないと  
理解されない。

気仙沼支部長  
小野良組（気仙沼市） **小泉 進 氏**

宮城県建設業協会気仙沼支部長。小野良組社長。震災後の2013年5月に社長に就任。気仙沼のまち全体がよくならないと、建設業もよくならないと水産業界の復興を懸念。これまで以上に地域活動に参加し、建設業から見たまちづくりを提案したいと話す。気仙沼市出身。

# 復興の 先を見据えてる

## 英断

震災のあった年に、気仙沼市長が宮城県建設業協会の気仙沼市内のメンバーを集め、「12月28日までにがれきを撤去してくれ」と言ってきた。当時の状況から、そう簡単には返事ができない。「どうしても12月28日ですか」と聞くと、「明るい希望を市民に与えたい。何とかできないか」ということだった。

やるなら「オール気仙沼」体制にしようと、市の工

事登録業者すべてに声を掛け、「災害廃棄物処理協議会」を立ち上げた。1社残らず加盟してもらったが、「地元でできないか」という言葉があったからこそ、まとまることができた。市長の英断だった。

地域建設業と市長、行政の思いが一致し、だれもが一切文句を言うことなく、がれきの撤去を終わらせることができた。

## 別次元

がれきの撤去が終われば、(焼却などの)二次処理に入るが、ここから大手ゼネコンが入ってきた。二次処理に参画できた地元企業は半分以下だったのではないかと。ダンプなどを保有する会社は参画できたが、工事を行う建設会社はほとんど入れなかった。その後、防災集団移転の造成工事に入ったが、やはり地元の建設会社はあまり参画していない。

そのころには民間の仕事や海の仕事も増え、手が回らない事情もあった。だが、地元建設会社は金額的にも太刀打ちできず、(がれきの二次処理や土地造成は)別次元の仕事になってしまった。残念だが、地元建設会社で対応できる事業量ではなかった。

## 真の復興

がれきを撤去し、土地造成やかさ上げが終わったところから工場や倉庫が建ち始めているが、力のある大きな水産加工会社ばかりだ。中堅以下の水産加工会社はどう復興していくのか。土地のかさ上げや災害公営住宅の整備が進んでも、産業の復興が不透明だ。まち全体がよくならないと、建設業はよくならない。

今は仕事があるが、まちづくりが終わればインフラ整備は減る。民間企業ががんばって、第一工場、第二工場、第三工場を建てて、順に修繕していくサイクルができないと、全体の復興にはならない。

震災直後から「商品の棚」がなくなってしまったと聞く。当社のお客さんの中でも大手の水産加工会社は復旧が早く、売れ筋商品を持っていたから復活で



気仙沼漁港で出港を待つ船(2015年10月28日)。

きたが、それでも以前の8割程度だという。大手スーパーや商社は、気仙沼がダメならほかの地域から商品を仕入れる。まるっきり「商品の棚」がなくなった水産加工会社は、新しい商品から考え直さなければならない。

当社は10年前に民事再生法を申請し、トイレのドアノブの修理のような小さな仕事からやってきた。そうした仕事をいただいていたお客さんが、復活できないでいる。地域建設業は「地域の町医者」だと言われるが、患者がいないと機能しない。

## 女性技術者

個人経営の会社には、だんなさんが社長で奥さんが専務を務めるケースもある。当社の仙台支店には以前から女性技術者がいるが、「奥さんと話をすると、私には男性技術者に言わない話をする」と聞いていた。彼女が行くと、奥さんである専務から違ったアイデアも出てくるという。

震災の年には大宮知恵を採用した。東京のライト工業で2年間の研修をさせたところ、同社の

社長に気に入られ、「離さない」と言われた女性技術者だ。「女性技術者のパイオニアにしよう」と考え、気仙沼の本社に戻して災害公営住宅の仕事を任せている。仕事では女性であることを意識せず、「技術者になりたい」という思いでがんばっている。現在も女性技術者1人に入社をオファーしていて、設計部門に配属したいと考えている。

## 地域活動

建設業界がどういう役割を果たしているのかが、きちんと地域で認識されていない。震災後に冷凍冷蔵庫から腐敗した魚を出す作業があったが、ほとんどの水産加工会社が、従業員にはやらせなかった。過酷な作業をしたのは地域建設業だ。「建設業は金をもらうんだから」という感覚だ。「冷凍冷蔵庫の壁を傷つけるなよ」とも言われた。

建設業は「受注産業」「請負産業」ととらえられてきた。我々のPR不足もあるが、これまで積極的に地域活動に参画してこなかったからだ。仕事に直結しなくても、地道に地域活動をやらないと、地域建設業は認めてもらえない。私は気仙沼商工会議所の



気仙沼のまちづくりについて説明する小泉支部長(右、2015年11月13日)。

常任委員なども務めているが代理を出さず、時間が許す限り出席することになっている。

地域のまちづくり協議会にも当社の土木部長を出している。気仙沼では、まちづくりの核となるものがないままに時が過ぎた。地域建設業から見たまちづくりがあるはずなので、積極的に提案していきたい。それにはまず、地域における建設業の役割を認識してもらうことだ。「建設業や小野良組は、まちのためにやっているよな」と思ってもらえないと理解されない。

(インタビューは2015年10月28日)



地域建設業から見たまちづくりがある(2015年10月28日)。

# 3. 未来を担う 若手技術者

東日本大震災は、被災地の地域建設業の若い社員に対して、通常ならあり得ないさまざまな経験を強いることになった。震災のあった2011年3月に学校を卒業して地域建設会社に入社した若手技術者と、地域建設会社で活躍する女性技術者に話を聞いた。地域建設業の未来を担う彼らは、震災を通して何を体験し、何を想うのか。



# 未来を担う 若手技術者

心掛けているのは、  
作業員との  
コミュニケーションだ。  
うまく取れれば  
互いにやりやすいし、  
現場の雰囲気もよくなる。  
苦手なタイプの  
作業員もいるが、  
私から積極的に  
声を掛けるようにしている。

河北建設（仙台市） 寺田 知史 氏

河北建設工事係。第2霞目雨水幹線工事1を担当している。高校の土木科を卒業して、2011年4月入社。埼玉県土木工事現場に配属され基本的なことを勉強した後、仙台に戻って三つの土木工事を経験した。機会があれば、震災復旧工事を手掛けてみたいと話す。利府町出身。



左：集会場を借りての入社式（2011年4月）。  
右：2階部分が座屈した本社ビル（2011年3月）。



## 入社式

入社式に出席するため2011年4月に会社に出ると、震災で3階建ての本社の2階部分が座屈していた。「面接時にはきちんと建っていたのに。大丈夫かな」と思った。

本社が使えなかったため、近くの集会所で入社式が行われた。社長から、震災も踏まえ会社がどういう方向に行くかの説明があり、「復興で忙しくなる。戦力になれるようがんばってくれ」と言われた。「みんなに好かれる人間になれ」「コミュニケーションが取れる人間になってほしい」という言葉ももらった。社長の話を聞いているうち、胸に抱えていた不安はなくなった。

## 埼玉へ

社内ガイダンスの後、すぐに埼玉県の下水処理場の現場に配属された。当社は東北だけでなく、関東以北のエリアで仕

事をしている。初雁興業（埼玉県）が元請で、河北建設が一次下請だった。私が配属されたのは工期の途中からで、その現場には1年ほどいた。

その間、仙台の様子が気になり、本社にいる同期入社事務職に電話をしたり、同じ現場で働く先輩に状況を聞いたりもした。「被災地はめっちゃめっちゃだ」「遺体があった」などと聞き、「被災地はひどい状況なのだろう」と思った。

ただ、当時は入社したばかりで、何もわからない状態だった。本社が忙しい中、私が行っても役に立たないだろうと感じていた。埼玉の現場で勉強することができて、経験的にはよかった。

## 経験

仙台に戻ったのは2012年3月だ。地下鉄東西線の荒井トンネル工区の現場に配属された。地下鉄のシールド工事では、当社は安藤ハザマの下請だった。シールド機によるトンネル掘削と掘削後の覆工がメインで、私は施工管理を担当した。震災関連の現場ではない。先輩が厳しい環境で復旧・復興工事をやっている中、恵まれた環境で工事を担当させてもらった。シールド工事はめったに経験できない。



寺田氏が手掛ける雨水幹線シールド工事(2015年8月22日)。

その後、仙台市発注の市道の新設工事を1年ほど担当した。当社単独の元請工事で、所長と私の2人が配属された。それまでは下請工事だったので、現場をみているだけでよかったが、元請として図面や書類に関する仕事もしなければならない。初めてだったので、すべての面で勉強になった。測定の仕方や書類のつくり方、さらには元請の立場での現場の見方を学ぶことができた。

## 現在

現在は、仙台市発注の雨水幹線のシールド工事を担当している。場所は仙台市若林区今泉のポンプ場内だ。施工は安藤ハザマ・奥田建設・河北建設JV。直径3メートル×延長4キロのシールド工事だ。私にとって四つ目の現場だが、工事の流れはつかめてきた。

施工管理を行う上で心掛けているのは、作業員とのコミュニケーションだ。うまく取れれば互いにやりや

すいし、現場の雰囲気もよくなる。中には口数が少なく、苦手なタイプの作業員もいるが、私から積極的に声を掛けるようにしている。やはり、入社式での社長の言葉が大きい。最初は相手にされなかったが、私の意見を聞き入れてくれるようになった。

## 将来

私はこれまで、直接は震災関連工事にかかわっていないが、いろいろな工種の現場を経験してきた。まだまだ復興工事はあると思うので、担当できるなら力になりたい。構造物をつくる工事を経験してきたので、トンネルや下水道、堤防などの復興工事があれば挑戦してみたい。

また、一級土木施工管理技士の試験に合格し、早く自分の現場を持ちたい。実務経験が必要なので私の場合、二級土木施工管理技士の試験を今年受け、合格すれば来年には一級土木施工管理技士の試験を受けるこ

## 地域建設業

仕事を辞めようかと思ったこともあったが、多くの現場を経験したからこそわかることもある。この仕事を選んでもよかった。日本全国からきた下請や職人と仕事だけでなく、プライベートでも付き合うことができる。釣りに誘われたり、ゴルフを始めたりもした。さまざまな地方出身者がいるので、いろいろな体験ができる。

道路などのインフラに対する地域住民の声があり、それに答えるのが地域建設業の役割だ。住民の声に応えるのは役所だが、直接的に工事をするのは



施工管理業務をこなす寺田氏(2015年10月22日)。

とができる。まずは今年、二級に合格することだ。

資格を取って、ここ数年の間に現場を持てるだけの知識と力を身に付けたい。現場を持つ上司を見てみると、仕事量が多い。私が初めて元請を経験した道路工事の現場では、書類関係を含めほとんどの仕事を所長が1人でこなしていた。

我々だ。よりよいものをつくって、地域に貢献していくのが役割だ。

(インタビューは2015年8月18日)



## 社長から

2011年4月に入社したのは、寺田のほか事務職が1人だ。入社時には震災の影響で本社ビルが倒壊し、「この会社は大丈夫か」と驚いたのではないか。

入社式では、「みんなに好かれる人間になってほしい」という話をした記憶がある。現場にいるのは年上ばかりだ。「コミュニケーションが取れる人間になってほしい」とも話

した。

入社から数年が経ち、寺田はあちこちの現場でもまれて一人前になりつつある。いろいろと評判も入ってくるが、周りとコミュニケーションを取って、よくやっていると思う。これから多くの人の信頼を勝ち取っていくのではないかと。仕事に対する責任感もあり、努力家だと思っている。

河北建設 門間 剛氏

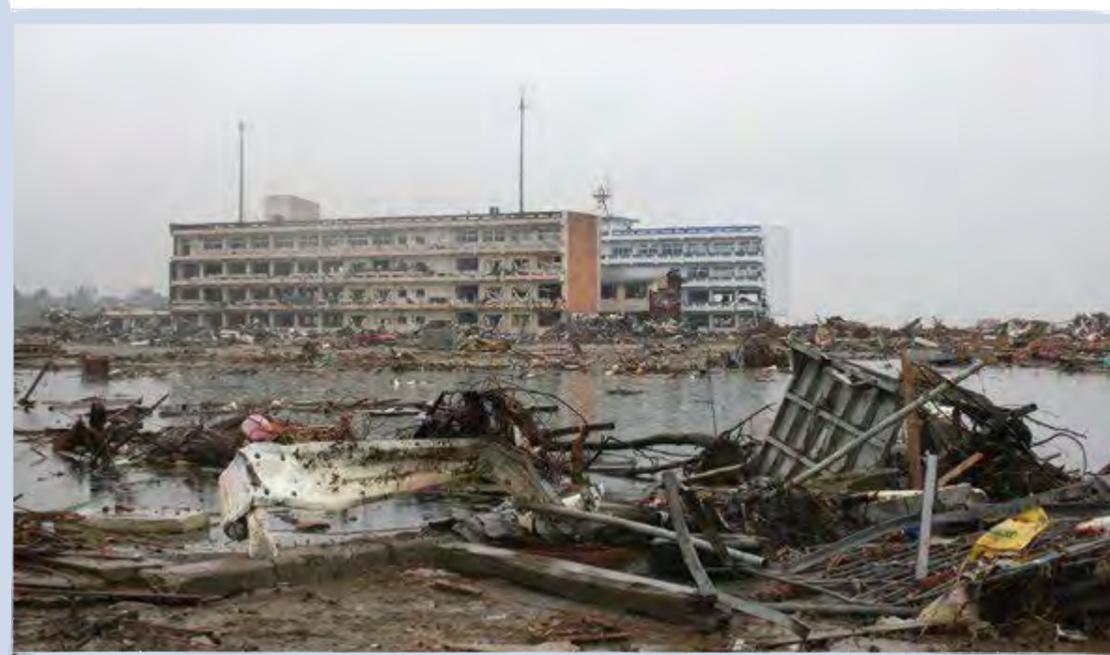
# 未来を担う 若手技術者<sup>2</sup>

自分の成長もあったし、  
地域が復興してきている  
のがわかる。  
だから、つらいことも  
まだまだ大丈夫だ。  
気が遠くなるほど先は  
長いが、  
間違いなく  
がんばっていける。

小野良組(気仙沼市) **大宮 知恵** 氏



小野良組建築部技師。建設業の仕事をしている父親の影響で建築の道へ。短大卒業前に震災が発生。2011年4月に入社したが、すぐに東京に研修へ。たった1人で不安を抱えながら2年間の研修を終え、小野良組に戻った。現在は気仙沼で最盛期を迎えた災害公営住宅の仕事に追われる毎日だ。柴田町出身。



津波被害を受けた気仙沼市内の状況(2011年3月)。

## 東京へ

震災時はまだ、築館(栗原市)の短大に在学していた。車などの移動手段もなく、4~5日は築館の避難所にいた。テレビで気仙沼市の津波被害の映像を見た。「私が行く会社のあるところだ!」。不安になったが、小野良組には連絡がつかなかった。内定をもらった時、「2年間はグループ会社のライト工業(東京都千代田区)で研修してこい」と言われていた。東京のライト工業に電話をするとつながり、多くの人の力を借りて車を乗り継ぎ、築館から柴田町の実家に戻ることができた。

## 不安

2011年4月1日から東京のライト工業の現場に出ていた。不安だった。「震災後の大変な時期に東京の会社において、自分は何をしているんだろう」と思った。本当なら気仙沼の復旧を手伝わなければ

ならない。

東京では、朝早くから夜遅くまで現場に出て、職人さんに怒られることも多かった。自分の説明が足りないのか、女だからなのか、職人さんが話を聞いてくれないこともあった。それが続いた時期はつらかった。東京には友人もいない。建設業を続けていく意味すらわからなくなった。だが、何かを勉強して気仙沼に戻らなければ。気仙沼にいない分、がんばらなければ。辞めるわけにはいかなかった。

## 気仙沼へ

小野良組の社長に会えたのは、震災から約1年後だ。社長が東京にきた時、ライト工業の本社に呼ばれ、あいさつをした。その後も社長が東京にきた時に話をする程度で、小野良組とのやりとりはなく、果たして自分が戻っていいのかもわからなかった。2年経って小野良組に戻ることができた時、みんなが快く迎えてくれて、うれしかった。

## 災害公営住宅

気仙沼では2年間で約800世帯の災害公営住宅を建



大宮氏が手掛けた階上地区の災害公営住宅(2015年9月28日)。

設することになっている。造成の工事が終わったところに、災害公営住宅を建設しているまっただ中だ。気仙沼市発注の災害公営住宅を「気仙沼地域住宅生産者ネットワーク※」で受け、(会員企業である)私たちが施工している。小野良組で手を付けたのは、<sup>はしかみ</sup>階上地区で戸建て10戸(10世帯)と長屋2棟(6世帯)、<sup>からくわ</sup>唐桑地区で戸建て4戸(4世帯)だ。私は所長の下で現場監督をする立場にあり、このすべてにかかわっている。

2年間で約800世帯の目標に向け、災害公営住宅の建設工事が予定が詰まっている。やってもやっても終わりが見えてこない。仕事をしている最中に次の仕事に手を付け、その次の仕事にも手を付けなければならない。「これから何棟あるんだろう」「この工事は工期がいつまで許されるのか」。プレッシャーの毎日で、気が休まることがない。

当社だけでまだ、50戸以上は建てなければならないと思う。造成のめどが付いたところから各社に工事の割り振りが決まる。さらに増える可能性があり、なお

さら終わりが見えてこない。

## モチベーション

自分が携わった建物に、お客さんが引っ越してくるのを見る機会があった。「やっとなんとした家に住めるんだね。本当によかったね」と言いながら建物に入る家族を見た時、「私たちは、本当に必要とされているものを建てているんだ。やっとなんとした」と思えた。それが仕事へのモチベーションにつながっている。

## 成長

気仙沼に戻ってから、より人間的に成長したと感じる。東京ではひたすら現場に出て、言われたことをこなすのが精いっぱいの日々だった。今は自分で考えてやるべきことを見つけ、現場の流れをつくる仕事を徐々に任せてもらえるようになってきた。

## 将来

気仙沼に帰ってきてからの時間はあっという間に感じられた。でも、中身は濃くて、自分の成長もあったし、地域が復興してきているのもわかる。だから、つらいこともまだまだ大丈夫だ。気が遠くなるほど先は長いけど、間違いなくがんばっていきける。

災害公営住宅の仕事を無事に終わらせることが当面の目標だ。一歩ずつ着実に、前へ前へと進んでいきたい。

※気仙沼地域住宅生産者ネットワーク：災害公営住宅整備の支援などを行う地元組織。地域の木材関係業者や建材流通業者、設計事務所、建設会社で構成する。

(インタビューは2015年8月17日)



快く迎え入れてくれた会社のバドミントン部の仲間と。

現場の状況を確実に把握してから、打ち合わせに向かうよう心掛けている。最初のころ、図面上だけで話をし、職人さんに「本当にお前は、現場を見てものを持っているのか」としかられたことがある。それから自分の目で現場を見て、話をするようになった。



## 社長から

最近、現場の女性技術者が注目されるようになってきたので、大宮にある時、「だぼだぼの男用の作業服ではなく、女性らしい服装をしようよ」と話すと、「なぜですか。必要ありません」と言われた。仕事をしている時は「女性だ」という意識がないのだと思う。「技術者になりたい」という思いで、作業服を汚してまでが

2年前に気仙沼で1,000人規模の安全大会があり、大宮に発表させたところ、しゃべり方も堂々としていて、いろいろな方に評価された。また、飲み会の時などには、女性らしく小まめに気を配って動く。あいう子がクローズアップされると、高校生や大学生(の女性)があこがれて、建設業に入ってくるかもしれない。

小野良組 小泉進氏

# 未来を担う 若手技術者

これから仕事の細かい部分を身に付けていくことになる。資格がないと独り立ちできないので、一級建築施工管理技士の資格を取り、少しでも早く会社に貢献したい。

皆成建設（仙台市）**水戸 貴文** 氏

皆成建設建築部建築課所属。震災直後の2011年4月入社。内定取り消しなどの不安を感じたこともあったが、入社式での社長の言葉に「身が引き締まる思いを感じた」という。建築技術者として経験を積み、現在は仙台市中心部で立体駐車場の新築工事を担当。角田市出身。



震災直後に作業着で行った入社式の様子（2011年4月）。

## 入社

震災時は大学卒業前で角田市の自宅にいた。当時は情報が錯綜し、（皆成建設に近い）仙台市若林区六丁の目まで津波がきたという話もあった。震災で大学の卒業式もなくなり、周りから「内定取り消し」なども聞いていたのでとても不安だった。数日後に「会社は大丈夫なので心配しないでください。予定通り採用します」と連絡があった。

周りの会社が入社式を取りやめる中、皆成建設は入社式を開いてくれた。社長や会長も忙しい中、出席していただきとてもありがたかった。社長から「非常事態なので大変だろうが、がんばってくれ」という言葉をいただき、身が引き締まる思いだった。「震災でしか経験できない仕事ができるはずだ」という高揚感もあった。

## 被災状況調査

最初に担当したのは、当社が施工した

住宅の被災状況の調査と対応だ。人手が足りなかったため、社長と2人で亘理町などの津波被害を受けながら残った物件や地震被害物件の調査と対応工事に回った。2週間は社長と回ったと思う。社長も建築技術者なので、いろいろな話を聞くことができた。そんな機会はなかなかないので、とても貴重な時間だった。

## 経験

次に配属されたのは、鉄骨(S)造の商社事務所(仙台市若林区)の新築工事の現場だ。着工段階から5カ月程度担当し、完成後はインテリア家具店舗(仙台市泉区)の震災復旧工事を担当した。地震でエスカレーターが落ちたり、外壁がはがれたり、内部もひどい状態で実質的には改築工事に近かった。上司とともに現場管理を担当した。宮城刑務所(仙台市若林区)内の関連施設の工事も担当した。刑務所内の古い建物が、震災で建て替えや解体が必要になっていた。5施設程度を解体し、倉庫を新築した。

## 災害公営住宅

最近まで担当していたのは、仙台市発注の災害公営



水戸氏が手掛けた災害公営住宅。初めての鉄筋コンクリート造の現場だった(2015年5月31日)。

住宅(仙台市宮城野区)の2期工事だ。3棟で構成される168戸の共同住宅で、施工は佐藤工業・皆成建設JV。当社からは私と上司の2人が現場に配属され、施工管理を担当した。それまではS造が主だったので、初めての鉄筋コンクリート(RC)造の現場だった。RC造でこれだけの規模の現場はなかなかないので、よい経験をさせてもらった。2015年7月から入居が始まっている。

角田市の自宅は山沿いなので被害が少なかったが、一つ山を越えれば亙理町など津波被害のあった地域だ。実家の周りにも仮設住宅ができていたので、「災害公営住宅にかかわることで、被災した方の手助けになれた」という気持ちは強い。地域の人と直接、話をする機会はなかったが、自分が担当した公営住宅に住む人の安心したような顔を見ることができてよかったと思う。

## 気苦労

建設業なので、夜遅くまでの作業は覚悟していた。実家が建築関連の仕事をしていたので、状況はある程度わかっていた。そんなにつらいと思ったことはない。

ただ、震災後は職人が不足して取り合いになり、協力業者を集めるのに苦労した。資材も入らず、コンクリートも思うように打設できなかった。時間をずらして遅くまで作業をすることもあった。その日に打設しないと、(次の打設が)1週間先になってしまい、工期が遅れる。

## 5年

長いようで、あっという間の5年だった。震災がなければできない経験もあったので、よいチャンスをもたらったのかもしれない。震災がくるまでは、建設業界も需要が落ち込んでいた。

現在は、立体駐車場の新築工事を担当している。190

## 将来

建設業は特殊な仕事なので、1~2年やったからといって一人前になれるわけではない。やっと建設業の仕事が一通りわかってきて、これから仕事の細かい部分を身に付けていくことになる。資格がないと独り立ちできないので、一級建築施工管理技士の資格を取り、少しでも早く会社に貢献したい。

資格を取って、まずは現場所長になり、自信を持って建物を建てたい。先輩たちのように、建築技術者として早く一人前になりたいというのが当面の目標だ。

当社は社長も建築技術者で、誰にでも社長になれるチャンスがある。同じ建築技術者として尊敬しているので、いつかは私も社長のようにになりたい。

(インタビューは2015年8月18日)



施工管理業務をこなす水戸氏(2015年10月23日)。

台程度の大型パークイングの新築工事だ。多くの人が行き交う仙台市内(仙台市青葉区)で、まち中での施工を勉強中だ。国道と市道に隣接する場所なので、第三者災害には十分に気をつけている。



## 社長から

水戸は、入社時から震災による緊急事態だった。当社では、新卒者に単に内定を出すだけでなく、先輩社員をお世話係として付け、入社前から会社の催し物や勉強会に参加してもらおう。1年以上かけディスカッションを重ねてきたので、「ちょっとやそっとではへこたれないだろう」と見ていた。震災で内定を取り消す会社もあったが、そういうことはし

たくなかった。

入社式は通常、スーツ姿で行うが、我々も含め作業着で行った。私が話したのは「よくぞ、きてくれた。大変だよ」ということだ。

経験を積みなければならぬ部分はあるが、水戸はまじめで一生懸命だ。後は自分でいかに技術を身に付け、独り立ちしていくかだ。

皆成建設 南達哉氏

# 未来を担う 若手技術者4

この職業が自分に合うかどうかの判断は、もう少し先でもできる。しばらくは地域の復旧・復興を優先的に考えて、この仕事でがんばっていこうと思う。

木村土建（東松島市） 焔山 祐機 氏



木村土建業務課所属。2011年3月に高校を卒業し、石巻市の水産加工会社で働き始めてすぐに震災が発生。工場が被災して解雇されたため、2012年3月に木村土建に入社。慣れない高所作業や力仕事に耐えながら、住宅の解体作業を務め上げた。東松島市出身。



石巻市内の津波被害の様子（2011年3月）。焔山氏が勤めていた水産加工会社も工場が被災した。

## 解雇

2011年3月1日に高校を卒業し、3日から石巻市の水産加工会社で、エビなどの魚介類を冷凍する仕事をしていました。海のそばに工場があり、フォークリフトに乗っている時に震災があり、建物の2階に避難したが、すぐ下まで津波がきた。人生で一番恐ろしい体験だった。自宅のある東松島市に戻る時には遺体も見た。「亡くなった方に申し訳ない」と、気持ちも沈みっぱなしだった。

水産加工会社には、私を含め5名の新入社員がいたが、工場が被災したため解雇という形になってしまった。しばらくして木村土建にお世話になることになったが、全く違う職業柄になり、とまどいや不安はあった。だが、当時の状況では、水産加工も復旧には時間がかかる。順番としては、がれきの片付けや道路の整備が最優先だという思いがあった。「震災復興に向けてやっていくしかない」という一心で仕事に取り組んできた。「亡く

なった方のため、生き残った者ががんばらなければならない」という気持ちもあった。

## 解体作業

2012年3月に木村土建に入社し、4月から民家の解体工事の作業員として現場に入った。高いところが得意ではなく、高所作業の経験もなかったので、屋根瓦の荷下ろし作業は大変だった。命綱は付けるが雨が降れば滑りやすいし、古いお宅であれば屋根が抜けて落下する恐れもある。周りの方にも影響を与えないよう、慎重に作業をしなければならない。特に夏場はきつかった。高温の中、何時間も高所にいなければならない。熱中症になり体調を崩しやすい状況での高所作業には、苦労があった。

最初は現場の作業の流れについていけず、上司に迷惑をかけた。解体にも工期があり、間に合わせるよう心掛けたが、時間に追われるつらさは感じた。また、瓦は重量があり、屋根から下ろすのは苦難の作業だった。それまで肉体労働をしたことがなかった。普段、使わない筋肉を動かすので、肉体が悲鳴を上げたのか、動けなくなってしまうこともあった。日曜日もゴールデンウィークもなしで作業をし、休養を十分に取れない日が続いた。



自社の産業廃棄物処理場「エコランドキムラ」での業務状況(2015年10月21日)。

## 上司

新入社員は私1人だったので、同期もいなかった。社会人1年目でもあったので、上司の指示を仰ぎ、言われた通り動くよう心掛けた。解体の課長さんは技術的な指示も的確で、周囲を気遣ってくれる方だった。40歳代後半の方で、みんなに慕われていた。たいいていの現場は課長の下に就くことが多く、上司に恵まれた。

解体作業は通常、5～6人体制で行うが、仕事が重なり、「2人でやってくれ」と言われたこともあった。「後で人員を増やすので、できるところまで2人で作業してくれ」という指示だったが、その時は広いお宅だったので心細かった。

## 職業柄

建設業の仕事を辞めたいと考えたことは、何度かあった。学生時代からやりたい仕事が水産加工だった。だが、ぜいたくを言っている場合ではない。震災復興

といえがれき処理が最優先だ。辞めたい気持ちを抑え、(余計なことは)考えないようにしながらがんばってきた。

解体工事をした民家の家主さんやハウスメーカーに感謝を伝えられた時はうれしかった。工事が完了した段階で、家主さんやハウスメーカーに確認してもらのだが、「ていねいに作業をしてもらってありがとうございます」と言われるのは、ホッとする瞬間でもあった。失敗なく工事を終えた達成感を感じた。

## 成長

解体工事では、筋力もついて体の抵抗力も上がった。風邪もひかなくなった。苦労はあったが、マイナスになったことはない。現場ではみな年上だったが、優しく接して教えてくれ、自分の成長につながったと思う。

現在は、産業廃棄物の配車業務に就いている。ユニット車や4トン車に回収場所を指示する仕事だ。お客



配車業務をこなす畑山氏(2015年11月20日)。

さんとの対応は電話がほとんどなので、コミュニケーションには気を配っている。いろいろな方がいるので、(電話だけで)相手の気持ちを読むのが難しい。また、

当社は早さを売りにしているので、お客さんの要望した回収期日に応えられるよう配慮している。配車業務に代わってからは、話し方や電話のかけ方などマナーを学ぶことができた。

## 将来

現在の職業が自分に合っているのか、不安になることもある。まだ22歳なので、別の職種にもチャレンジできる。でも、この職業が自分に合うかどうかの判断は、もう少し先でもできる。しばらくは地域の復旧・復興を優先的に考えて、この仕事でがんばっていこうと思う。東松島地域は仙石線が開通し、沿線の宅地造成もようやく完成する。復興に向けて、災害公営住宅や民間住宅の事業が増えるはずだ。仮設住宅にいる方にとってプラスになる事業が発展してほしい。

(インタビューは2015年8月17日)



## 社長から

畑山は震災直後、当社の会議棟で避難生活を送っていた。昼夜構わず、震災復旧のために働く社員の姿を見て、「自分も働きたい」と言ってきた。解体工事とがれき処理を手伝ってもらったことにしたが、新人教育もできない中で現場に出すのは不安だった。水産会社と違い、現場によって条件も変わる。車両の運転、がれきの撤去・選別など、初めての経験ばかりでできなかったと思う。

現在は配車係を任せているが、お

客さまの要望を聞きながら効率よく配車を行う、という難しい仕事をこなしている。少しずつではあるが、お客さまにも信頼され、成長している。

震災で建設業の仕事に就き、震災復興に携わってきた。今後も地域に貢献し、お客さまに喜ばれる仕事をするにはどうしたらよいかを考え、勉強し、何事にも積極的に挑戦してほしい。

木村土建 木村 浩章 氏

# 未来を担う 若手技術者



橋本店高砂サポートセンター事務長。大学で土木工学を専攻し、2002年入社。震災時には子どもを連れて出社し、炊き出しや発注者との連絡調整など後方支援を担当。2015年2月から高砂サポートセンター事務長に。購買業務に加え、現場事務所の書類や原価管理の支援、本社の施工部門の支援も担当している。仙台市出身。

これからも  
事務と現場の両方を理解し、  
間にうまく入って  
対応していきたいと思う。  
現場も仕事が  
やりやすくなるはずだ。  
併せて、女性が  
長く働ける業界に  
なることを  
願っている。

橋本店(仙台市) **藤森 千穂** 氏



藤森氏が勤務する高砂サポートセンター(2015年8月18日)。

## 家族と仕事

震災後は発注機関や施主からさまざまな要請がきて、会社を挙げて対応に追われていた。当時、私には5歳の子どものがいて、家族も心配だったが会社に出ていた。

震災直後は保育園も開いていなかった。会社に許可をもらい、約1週間は子どもを連れて会社に出た。近くにいることができたので、安心して仕事できた。復旧現場に出る社員のための炊き出しなどの後方支援や、発注者からの要請のとりまとめ、連絡調整を行った。

仙台市泉区の自宅は被害がなかったが、主人の実家は女川町だ。津波がこない場所ではあったが、町の半分が津波で流され大変だったと思う。

## 後方支援

震災後、しばらくは資材、労務の確保が大変だった。購買業務では、生コンや

ガードマン、クレーンなどの調達を担当していた。震災前は「この地区ならこの業者」という感じで割り振りされていたが、震災後はどこに電話しても「これ以上は請けられない」と簡単に断られるようになってしまった。通常なら上司が選定していたが、「どこに電話しても断られてしまう。過去に使用したことがある下請け全社に見積もりを出してほしい」と頼まれることもあった。請けてくれる業者が見つかり、上司は「ありがとうございます!ありがとうございます!」と心からの感謝を請負業者に述べていた。

実際、下請会社もかなり大変だった。今までは仕事を請けるために回っていた営業担当者も、仕事を断るために営業をしていた。「仕事の依頼を断ることが苦痛で仕方がなかった」という言葉が、今も記憶に残っている。

本当にどうしようもない場合は、今まで全く取引がなかった業者も採用しなければならない。でないと仕事が進まない。よい業者もあれば、そうでない業者もいる。その点については、しっかりと見極めて、新規業者を入れる必要があった。



南三陸町の津谷川で行った「女性目線での現場パトロール」(2014年9月16日)。

## 必要な時期に

現場では、本当に資材や労務が必要な時期がある。それを外してしまうと、相手の協力業者ありきなのですぐには入ってこないし、ロスにもつながる。「直前に(資材や労務を)ほしいと言われても調達できない。前もってわかることは伝えてほしい」ということは、現場に通達していた。

工期が厳しく、緊急で何とかしなければならない現場もあった。ほかの協力業者を探して資材や労務を調達することになるが、大まかに言ってくる現場もある。本当に必要かどうかを冷静に判断しなければならなかった。

## 現場パトロール

現場からの要請を受け、「女性目線での現場パトロール」をしたことがある。昨年は南三陸町の津谷川の道路改良工事の現場に行った。所長から現場の説明を

受け、安全パトロールに同行し、私の目線で危ないと思ったところや、(地域にとって)わかりづらいと思った点を指摘した。

震災後、自ら志願して海の現場の安全パトロールに参加させてもらったこともあった。仙台港の防波堤工事など三つの現場を回った。気仙沼市には昨年2月、当社が施工した「二の浜1号トンネル」の貫通式の手伝いに出かけた。市内を見て回ったが、商店街は仮設で新しい店舗をつくるにもお金がかかる。「本格的に商店街が復活するのは何年後だろう」と思った。

## 女性の活躍

「女性目線での現場パトロール」を行う話は、発注機関からもあるようなので、要請があれば行ってみたい。また、社内に女性事務職員はほかにもいる。現場に足を運び、自分がどういう仕事の事務をしているかを見てほしい。その時、(事務長の)私も同行できればよいと思う。



津谷川の現場パトロールでは、女性の目線で気付いた点を指摘した(2014年9月16日)。

建設業はまだ男社会だ。当社で下請会社にアンケート調査をしたところ、女性技術者の数はやはり少なかった。増やす予定は「不明」の会社がほとんどだ。増やしていくには、「女性が働きやすいようトイレや休憩所を設置する」という意見が多かった。体力面で男性とは違う部分があるので、「作業を細分化し、女性ができる作業を分けてもらおうと働きやすいのではない

か」という、女性からの意見もあった。「現場の理解が一番だと思う」という回答もあり、私も同感だ。女性も現場で働けるよう、周りが考えてほしい。

## 将来

阪神大震災をきっかけに大学では土木工学を専攻し、橋梁の勉強をした。現場での勤務経験はわずかしかないが、施工部門に近い購買の立場として業務を担当している。現場の気持ちは現場の人しかわからない。事務の気持ちは事務の人しかわからない。その間に立つには両方の気持ちを尊重して対応しなければならない。私はこれからも事務と現場の両方を理解し、間にうまく入って対応していきたいと思う。現場も仕事がやりやすくなるはずだ。併せて、女性が長く働ける業界になることを願っている。

(インタビューは2015年8月18日)

## もっと女性が活躍できる建設業に

このところ建設業界では、女性の活躍を促す動きが活発だ。国土交通省と全国建設業協会など建設業5団体は2014年8月、「もっと女性が活躍できる建設業行動計画」を策定。官民を挙げて女性技術者・技能者を5年以内に倍増させる目標を掲げた。女性が働き続けられる職場環境をつくるため、トイレや更衣室などのハード面の整備と併せ、産休、育休、時短など、仕事と家庭を両立するための制度も導入する。



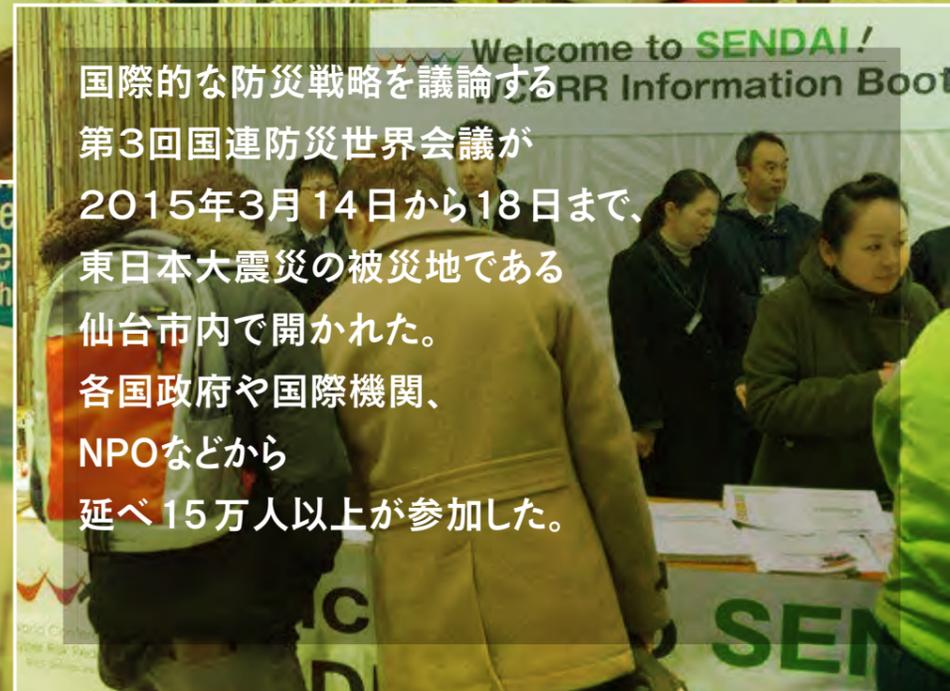
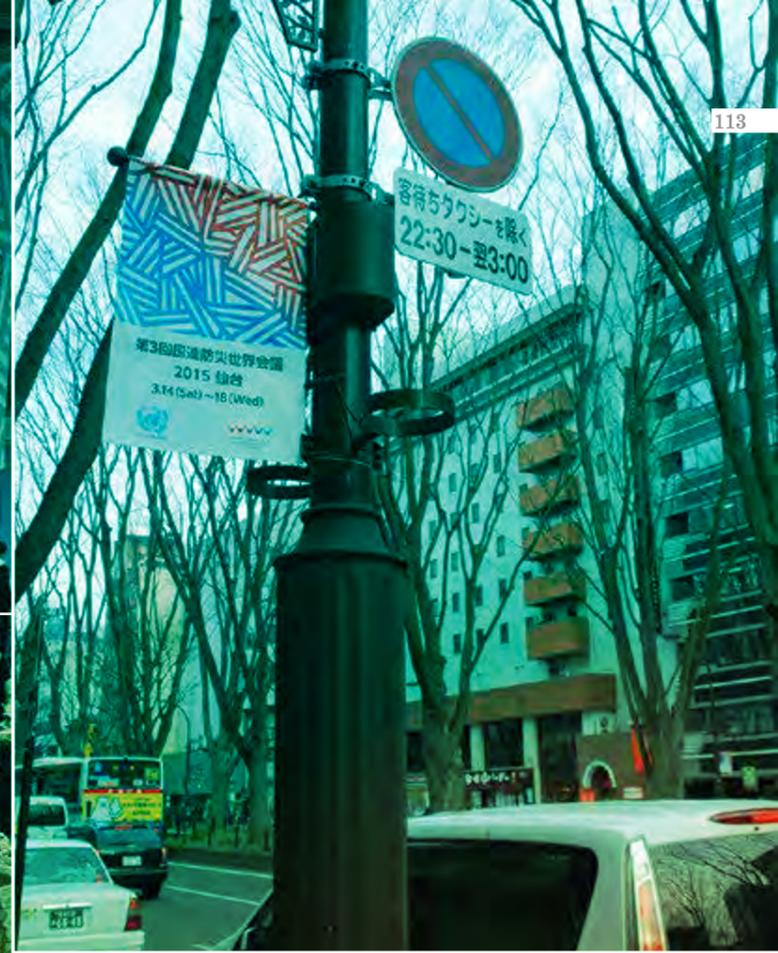
国土交通省と業界団体が協力して制作した「建設業女性の活躍応援ケースブック」。女性の活躍に向けた先進的取り組みを紹介している。

WCDRR | Sendai Japan  
2015.3.14/18

第3回国連防災世界会議  
2015 仙台  
3.14 (Sat) ~ 18 (Wed)

WCDRR | Sendai Japan  
2015.3.14/18

# 3. 国連防災世界会議 in 仙台 2015年3月14~18日



Welcome to **SENDAI!**  
WCDRR Information Booth

国際的な防災戦略を議論する  
第3回国連防災世界会議が  
2015年3月14日から18日まで、  
東日本大震災の被災地である  
仙台市内で開かれた。  
各国政府や国際機関、  
NPOなどから  
延べ15万人以上が参加した。



# フォーラムや イベント、 展示も

仙台建設業協会らによる災害廃棄物処理に関するフォーラム(2015年3月17日)。



宮城県建設業協会の展示ブース。せんだいメディアテークで(2015年3月14日)。



市内の至るところで展示やイベントが(2015年3月14日)。

国連主催の本体会議以外にも、関連行事としてさまざまな主体によるパブリック・フォーラムやイベント、展示、さらには被災地の現状を視察するスタディーツアーなどが行われた。

パブリック・フォーラムに出席した約1,000人のうち半数は一般参加者だった。建設業界が主催するシンポジウムやフォーラムとしては極めて異例。それだけ震災における地域建設業の活動に興味を持ってくれた人がいたということだ。



会場で配布した震災の記録誌の総集編に目を通す人も (2015年3月16日)。



一般からも多くの人がフォーラムに参加してくれた (2015年3月16日)。



## 未来に向けて 宮城県建設業協会もパブリック・フォーラム

宮城県建設業協会も3月16日にパブリック・フォーラムを開いた。テーマは「未来に向けて」。第一部が有識者によるパネルディスカッション「地域建設業が防災に果たす役割を探る」。第二部は、被災地取材した中学生記者が防災について提言する「写真で綴る、被災地の“いま”を伝えるプロジェクト」だ。

# 「地域建設業が防災に果たす役割を探る」

第一部のパネルディスカッションでは、4人の有識者が震災を振り返り、地域建設業が防災に果たす役割は何か、今後も持続的に役割を果たすには何が必要か、建設業に地域は何を期待するか、を議論した。



## 発注者による災害協定の評価も

西村 明宏 氏 国土交通副大臣・復興副大臣・内閣府副大臣(当時)

“住民の命と暮らしを守るためにも、行政と地域建設業が連携を強化することが必要だ。改正された公共工事品質確保促進法では、複数年契約や共同受注方式など、地域の社会資本を安定的に維持する入札契約方式を盛り込んだ。既に行政と災害協定を結んでいる地域建設業もいるが、公共工事の発注者が災害協定の締結状況を評価する取り組みも推進したい”



## 地方創生に貢献できるのは地域建設業

谷口 博昭 氏 芝浦工業大学大学院客員教授

“地域建設業は、10数年も建設需要が低迷していたので、立ち直りに時間を要している。将来見通しが成り立つビジョンを提示する必要がある。地域建設業は自分をアピールしないところがあるが、町医者としての役割をわかりやすく、ストーリー性を持って訴えるべきだ。地方創生は、地域に安全・安心に暮らし、地域で仕事を得て、定住できるまちづくりだ。すべてに貢献できるのは地域建設業のみだ”



## 住民を守らなくては、支えなくては

阿部 憲子 氏 南三陸ホテル観洋女将

“当ホテルには、地震直後から続々と住民が避難してきた。頼ってきた住民を守らなくては、支えなくてはという状況だった。父がチリ地震津波を経験していたので、眺めがよいだけでなく、高台の岩盤の上にホテルを建ててくれた。場の力は大切だ。この場所があったからこそ、困っている人の力になれた。南三陸町では人口流出が深刻なので、足を運んでもらえれば幸いだ”



## 組織、人員、雇用を維持できるか

阿部 隆 氏 阿部伊組社長

“地域建設業の強みは、地域の地形や地象、地域の事情を熟知していることだ。がれきに埋もれ、どこが道路かわからない状態で、道路啓開や迂回路の整備を行ったが、地域に精通していなければできなかった。1日も早く復興を成し遂げなければならないが、いずれ(被災地の)建設事業は減っていく。今の組織体制、人員、作業員の雇用を維持できるかが課題だ”



## 「写真で綴る、被災地の“いま”を伝えるプロジェクト」

第二部では、「スマイルとうほくプロジェクト<sup>\*</sup>」に参加した4人の中学生記者が、被災地の取材体験をもとに、防災についての考えを提言した。

<sup>\*</sup>スマイルとうほくプロジェクト  
東北に笑顔を広げ、その笑顔を全国に届ける活動。東日本大震災の記憶と体験を伝えることで、東北と日本全体の将来につなげる狙いがある。延べ94名の中学生が、岩手、宮城、福島県を15回訪問して取材活動を行った(2015年3月時点)。運営主体は、河北新報社など宮城、岩手、福島県の地元紙3社。



福島県郡山市の仮設住宅に入居している富岡町の住民を取材

中村 樹里 さん 岩手県、野田村立野田中学校

“原発事故に伴い富岡町全域が仮設住宅に避難しなければならなかった事実に衝撃を受けた。「ふるさとを失って、初めてその大切さに気付いた」という言葉が印象に残った。あたりまえに暮らす自分に気付き、大切にふるさとを守りたいと思った”



宮城県気仙沼市の道路啓開を行った気仙沼建設業青年会を取材

正岡 碧海 さん 京都府、立命館守山中学校

“がれき撤去の大変さをあらためて感じた。気仙沼建設業青年会によると、がれき撤去で1日に進むことができる距離はわずか数メートル。どれだけの時間や人手がかかったのだろうと感じた。心に残っているのは、「道路は命の生命線」という言葉だ。道路がなければ、生活ができないと実感した”



福島県浪江町の二本松事務所を取材

佐々木 詩織 さん 宮城県、大崎市立岩出山中学校

“原発被害を受けた浪江町では、日本全国へ散り散りになって避難生活を送る町民のためにタブレット端末を用意していると聞き、浪江町の情報を得ることができれば、ふるさとに戻りたい人の心の支えになると感じた。震災から4年が経過し、被災者の苦しみや求めるものも変化している。タブレット端末が被災者の生活の改善につながることを祈りたい”



津波被害が甚大だった岩手県大槌町を取材

酒井 崇光 君 北海道、札幌光星中学校

“津波で全壊した大槌町庁舎を見た時に、あまりにも衝撃的で、現実を受け入れるのに時間がかかった。テレビの映像と違って、想像を超えた光景だった。地震の多い日本では、誰もがいつ被災者になるかわからない。万が一の災害に対する準備をした上で、1日1日を大切に生きていかなければならないと感じた”



同プロジェクトのナビゲーターを務めるタレントのロザンの2人とフォトジャーナリストの安田菜津紀さんが司会を行った(2015年3月16日)。



# 来場者の声 (アンケート結果から)

## 第一部「地域建設業が防災に果たす役割を探る」について

“大震災直後から、被災者でもある方々が懸命に復旧に向けて取り組まれたことをあらためて知り、感銘と感謝の意を強くしました。報道されなかった事実も知り、本当に多くの方々の熱意に支えられ、ここまで復興に向けての歩みが進んできたことに、御礼申し上げます”

“震災直後は、消防、警察、自衛隊等の活動が主に報道されていたかと思いますが、建設業の方々がその先駆けとなり、ご苦労されていたことはあまり知りませんでした。地元業者は、地元にとってかけがえのないものです。どうか、これからもよろしくお願いいたします。がんばって下さい。私も、業種は違いますが地元の業者です。がんばっていきたいと思います”

“一般市民として、おかみさんの話に共感できた。しかし、あの3.11からの一週間に建設業の方々が尽力していたことを知ることができてよかった。「仮埋葬」の写真では、どのような気持ちでいたのでしょうか。主婦として、食べること、子どものことが一番のように思っていたが、我のことだけでなく、あらためて外側に目を向けることも必要であり、地域の力を強化しなければと考えさせられた。「町医者」が建設業ということ意識させられました。ありがとうございました”



石巻市内での仮埋葬(2011年4月)。

“建設業が防災に果たす役割について「こうだった」「ああだった」もっともっと具体的な事例を出し、訴えないといけない。建設業の方は言われなくてもわかっているが、一般の方、建設業以外の方は、ほんとうの必要性、重要性がわからないと思う。自己満足にならない訴えを続けるべきと思います”

“業界と地域住民との自助、共助をさらに大切に(業界イメージのアップを期待)”

“建設業に携わる人たちのおかげで少しずつですが、被災地に灯りがともされることを願っております”

## 第二部「写真で綴る、被災地の“いま”を伝えるプロジェクト」について

“子どもたちの真剣な被災地への調査、ふれあい、提言、感動しました。地元に戻り、防災への提言もよいことだが、同世代の被災を受けた子どもたちを思い、悲しみを共有し、次への行動もともに考えられるすばらしい取材プロジェクトです”

“中学生の方々の、本当に素直な感じ方、健気さに感動しました。次代を担う、こういう子どもたちが、少しでも生きやすい社会にするような復興のあり方を考えねばな、とつくづく感じました”

“実家も津波でなくなり、大切な人も亡くしました。その被害にあっている私たちでも、テレビでしか他の被災地を知ることはできません。この中学生のレポートで、知らなかったことが沢山あったことを実感しました。これを機にもっと他の被災地にも目を向け、何かできることをしなければという思いを強くしました。そして、中学生の視線は、忘れていた大切なことを気付かせてくれました。今の若者はしっかりしていますね。日本の将来にも期待できます!”



取材をする中学生記者(2014年10月)。

“私自身も被災を受けて、みなし仮設に住んでいますが、約100名の全国の中学生が自分の「目」で見て、現地で生で感じたことを地元に戻った時に伝えていくという、知り得なかったプロジェクトが進んでいることに「力強さ」を感じました。継続して5年目～15年後にも、このような発表の場があれば、とても心が強くなれそうです”

“充実した時間をお与えくださったことに感謝。貴重な資料を家族に、友人に地域に共有します”

“確実に自分よりも長生きをする、そして日本の将来を担う彼らの想いを大切に、彼らのためになるまちづくりをしたい”

# あれから5年 南三陸

深刻な津波被害を受けた南三陸町では、  
道路の線形も変わり、  
大規模な土地のかさ上げ工事も。  
大きく変わろうとするまちに  
地域の人たちは何を思うのか。

## 2015年10月



津波に襲われた南三陸町の被害状況。



工事現場に掲げられた地元の中学生のメッセージ (2014年10月)。



同じ場所から見た南三陸町。  
道路の様子も変わり、大規模なかさ上げ工事が。

# 対談

**宮** 城県南三陸町は、沿岸部でも特に甚大な津波被害を受けた地域だ。まちは壊滅状態となり多くの犠牲者を出しながらも、南三陸町の人々はどうか協力し、立ち上がってきたのか。宮城県建設業協会が主催した国連防災世界会議でのフォーラムにパネリストとして登壇した、阿部伊組の阿部隆社長と南三陸ホテル観洋の女将の阿部憲子氏にこれまでを振り返ってもらった。

## 5年間を振り返って

**阿部隆** 震災当時、インフラがとまり、ろうそくの炎で家族が食卓を囲んでいたことをなつかしく思う。落ち着いてきた現在だから感じることだ。まちは壊滅し、がれきの山と化していたころには、「1日も早く片付けなければならない」と無我夢中だった。(南三陸町の)建設業協会の仲間とうまくチームワークが取れ、問題なくがれき処理を終えることができたことは、自信にもつながった。

**阿部憲子** 私どものホテルは公の避難所ではなかったが、住民が続々と避難してきた。泣き出す人もいたので「守らなくては」と思い、被災者支援に動き出し

た。ホテル業は「食」と「住」に強みがあり、思った以上に災害時に果たせる役割がある。電気は2カ月間、水は4カ月間止まった。特に水問題は深刻だったが、力を合わせて乗り越えることができた。

**阿部隆** 復旧が本格化した後は、漁港の防波堤や物揚場を(水揚げなどの)作業ができるところまで急ピッチで復旧させた。南三陸町は漁業のまちなので、水産業の復興を直ちに応援しないと、まちそのものが疲弊してしまう。現在は漁港施設の復興に向け、ほぼ完成形で施工している。土地のかさ上げ工事は6~7割が完了し、これから本格的なまちづくりに移行していく。地域のにぎわいをどう創出するかが問われるようになる。

阿部伊組社長

## 阿部隆氏

震災時には、宮城県建設業協会の気仙沼支部長を務めていたが、南三陸町と気仙沼市をつなぐ国道45号が寸断されたこともあり、それぞれの地域で震災対応に取り組むことを決断。自身は南三陸町の応急復旧やがれき処理に奔走した。南三陸町建設業協会会長も務める。



南三陸ホテル観洋女将

## 阿部憲子氏

震災でホテルの建物も下層階は水に浸かったものの、南三陸町内の多くの建物が土台だけになってしまったのを見て「守られた施設だった」ととらえ、津波から逃れてきた多くの人々を受け入れ、支援活動を行った。南三陸町産業振興審議会委員も務める。

## 南三陸は壊滅から どう立ち上がってきたのか？

### 地域における建設業、ホテル業の役割

**阿部憲子** 隣家の方が隣町に行ったとか、親友が県外に行ったとか、震災をきっかけに、地域がバラバラになった。そのため当ホテルが2011年5月にあらためて二次避難所に指定された時には、新しいコミュニティの始まりを意識した。みなさん、長い間、体育館などの板の間で段ボールで仕切られたわずかなスペースで生活し、疲れ切った表情でやってきた。専門家に「引きこもりにならないよう配慮してくだ

さい」と指導された。やっとならぶ上で生活し、布団で休める状況で、「部屋に引きこもらないようにするのは、そう簡単ではない」と気付き、ホテル内でいろいろなイベントを行うことにした。

歌手や演芸家の方々、編み物やミシンがけを教えられる方にきてもらった。お茶の会や落語の会、マッサージなどのイベントも行った。仲間が増え、みなさんがだんだん笑顔になり「嫌なことを忘れるこ



配慮したのは、  
家族や財産をなくした人と連絡が取れたり、  
希望があったりした場合には、  
位牌やお金をていねいに扱って  
返してあげることだ。  
地域建設業でないと対応できない。

とができた」と言ってくれた。スピード感を持って  
ことにあたるには、私どもにも力不足の部分がある  
ので、外からの温かい応援の力も借りながら、今日  
を迎えることができた。

二次避難所になった段階では、地域住民の方に医  
療、電力、NTTなどの関係者も加え、約1,000人が  
このホテルで生活した。

### 地域建設業の役割

**阿部 隆** がれき処理の作業をするにあたって配慮し  
たのは、家族や財産をなくした人と連絡が取れたり、  
希望があったりした場合には、位牌やお金をていね  
いに扱って返してあげることだ。地域建設業でない  
と対応できない。道路が寸断され迂回路をつくる時  
も、地域に根ざしているのも、住民に用地を借りた  
り、協力をお願いしたりするにも、時間をかけず動  
くことができた。

長い間、建設業の仕事がなかったので、作業員が  
不足していた。「職をなくした地域の人に、がれき  
処理を手伝ってもらえれば、気分転換にもなるだろ  
う」と考えた。南三陸町では震災から2週間後には、  
「地域の人の賃金を1日これくらいにしてほしい」と  
行政に掛け合い、がれき処理を手伝ってもらって  
いた。国が被災者雇用を正式発表する前の話だ。互い  
の顔が見えて、家族構成もわかっていることが、地  
域建設業の強みだ。

**阿部 憲子** 地域建設業のみなさんは心強かった。私た  
ちの地域は被災して、以前と全く違う世界に変ぼう

してしまった。国道も通行できず、「裏道がある」と  
か、「山道をいけば隣町に抜ける」とか、年上の方に  
教わることは少なくなかった。地元の建設業にも言  
えることで、知識や経験を通じてわかっていたこと  
がたくさんあったはずだ。

**阿部 隆** いざ、がれきを片付ける際に、機械を動か  
せる人がいないことにごくぜんとした。機械は調達  
できたが、最初の1~2週間は重機やダンプの運転手  
をかき集めても100人ほどだったのではないかと。ど  
うにもならない。そこから人の手配を始めた。手配  
できなければ、内陸の建設業の仲間に応援を要請し、  
班編制と担当区域を取り決め、それぞれ責任を持っ  
て施工することにした。

当時、「がれき処理のスピードが遅い」と言われた  
が、実は遺族や亡くなった方を最優先し、がれきの  
仮置きを3度も振り直していた。そうした作業工程  
がなければ、がれき処理は半分の期間で終わったは  
ずだ。だが、亡くなった方の思いを考えれば、やら  
なければならない。世間でいくら叩かれても、言い  
訳はしなかった。

**阿部 憲子** あの日、「守られた命は守られるべきだ」と  
思った。道路が寸断され、せつかく助かった命がど  
うなるかわからない人がたくさんいた。車1台でも  
通れるよう、建設業のみなさんにはいち早く道路啓  
開に動いていただいたが、地域に多大な貢献をされ  
たと思う。大変な惨状だったので、危険を顧みない  
行為でもあった。

**阿部 隆** 「頭が上がらない」と思ったのは、冷蔵庫の  
腐敗した魚の廃棄処理作業に携わってくれた方たち

助かった命が  
どうなるかわからない人がたくさんいた。  
車1台でも通れるよう、  
建設業のみなさんには  
いち早く道路啓開に動いていただいたが、  
地域に多大な貢献をされたと思う。



に対してだ。対応する業種がなく建設会社が受けざ  
るを得ず、建設会社の社員も処理作業に参加したが、  
大半は職をなくした地域の方に手伝ってもらった。  
私も現場に何度か足を運んだが、10分もいたら頭が  
痛くなるような悪臭と、ゴキブリに匹敵するような  
大きさのハエに悩まされた。梅雨時のじめじめした  
天気でウジ虫もわく中、7月までに処理作業をやりぬ  
いてくれた。みんな避難所にいた人たちだ。いくら  
洗ってもにおいが取れず、周りの人に遠慮して車の

中で夜を過ごし、仕事にくる人もいた。最後までい  
やだと言わずにやってくれたことに感謝している。

**阿部 憲子** 私どもは水産業も営んでおり、水産工場を  
持っているのも、当社のスタッフも同じような作業  
をした。あの大変さはやった人でないとわからない。

### 地域のホテル業の役割

**阿部 憲子** 二次避難所になってからも、水が限られて



多くの地域住民を受け入れた南三陸ホテル観洋(2015年10月27日)。



スピードを速めれば、  
将来にひずみが出る。  
ある程度の住民合意を形成し、  
将来のデザインを描きながら  
復興を進めることは、  
10年先を考えればマイナスではない。

る」という感覚が強いかもしれないが、私の中では「早くも遅くもなく、必定・必然の状態だ」と思っている。スピードを速めれば、将来にひずみが出る。ある程度の住民合意を形成し、将来のデザインを描きながら復興を進めることは、10年先を考えればマイナスではない。1日も早い復興を望んでいる方もいるので、言いづらい面はあるが、早いだけがまちや住民、地域のためになるかという、そうではない。

**阿部 憲子** 震災直後に感じたことが、被災地でも時間とともに変化してきている。震災当時は混乱していた。冷静に考えた場合、違う選択肢も出てくるだろうし、多様な考え方が持たれるようにもなってきた。地域経済のことを考えても、ただあわてることが本当によいのか。震災直後に決めたことを推し進めるだけではなく、その時々での聞き取りも必要ではないか。希望が持てる方向に進んでほしい。

**阿部 隆** ハードの整備は7割程度達成したが、残りの3割は時間がかかる。仕上げの部分になるからだ。ある部分は時間をかけ、「20～30年後の南三陸町の姿を明示して、まちづくりを進めて行ければよい」というのが本音だ。

**阿部 憲子** ハードが見えてくると、人の気持ちも明るくなるし、具体的なイメージもわいてくる。盛り土も進んでいるので、もう少し経てば、それぞれが将来のまちをイメージできるようになるのではないかと。「自分たちのまちなんだ」と、主体性を持った考え方が重要だ。ある時期からまちづくりの楽しさや期待が膨らむ雰囲気が出ると、地域が明るくなって

「教育が心配だ」という声が  
母親から挙げられたので、  
大学生のボランティアの力添えを得て、  
ホテル内で寺子屋を開くことにした。  
親も大変なのがわかっているのに、  
子どもたちも我慢していた。



いたので、お風呂は週2回、トイレは決められたフロアと仮設トイレを使うなど、ルールを決めてお願いせざるを得なかった。自治会を組織してフロアごとに班長さんを決め、毎週、夜に話し合いを持ったので、スムーズな避難所運営ができた。さまざまなイベントは、私たちホテル関係者と住民が親しくなる元にもなった。一番は住民同士の関係性の構築だったが、しばらくして住民の高齢者の方が「ここは一つの家族のようだ」と言ってくれた。うれしかった。大変な中で一体感が生まれ、難しいことがあれば協力せざるを得ない。日々の中で、それぞれの関係性がよい状態に変わっていった。

当ホテルが二次避難所になる時に、「子どものいる家庭と、経営者を優先したい」と申し上げた。子どもがいなければ復興の担い手を失う。また、まちづくりを進める上でいろいろなお店が必要だし、雇用の場が必要だ。水不足が続いていたので、「高齢の方はライフラインの整った避難所に行っていた方が安心だ」とも考えた。

大勢の子どもたちが当ホテルにきた。「教育が心配だ」という声が母親から挙げられたので、大学生のボランティアの力添えを得て、ホテル内で寺子屋を開くことにした。親も大変なのがわかっているのに、子どもたちも我慢していた。勉強を教わる一方、大学生が話し相手にもなってくれたので、寺子屋が子どもたちの心のよりどころになったのかもしれない。子どもたちが落ち着くと、親の表情も明るくなってきた。

二次避難所の役割は2011年8月に終了したが、現

在もそろばん教室と英会話のレッスンを続けている。やはり子どもたちが「被災地の希望」だ。57人がそろばんを習いにきているが、優秀な子どもたちだ。立派な大人に育ってもらえるよう、支えなければならぬと感じている。

**阿部 隆** 人の心は難しい。食べ物も手に入らない状況では、分け合っても食べたが、ちょっとでも状況が改善してくるとわがまが出る。日本人が世界にたたえられたのは、集団行動がとれることだ。相

手を思いやるのも日本人の素晴らしいところだ。

ホテル観洋には最大1,000人が避難し、寺子屋の話も聞いていたが、地域のコミュニケーションにも一体感にもつながる。子どもは大人より状況に敏感だ。ホテル観洋の対応は素晴らしかったと思う。

## 復興の現状

**阿部 隆** 時間と目的を照らせば、「復興が遅れてい



津波で破壊されたままになっている南三陸町のせせらぎ公園  
(2015年10月27日)。



「1,000年に一度の災害は、  
1,000年に一度の学びの場でもある」と  
感じるようになった。  
ちょっとした差で尊い命が失われた。  
繰り返されてはならない。

くる。

### 復興への課題

**阿部 隆** まちの将来像が頭に浮かばない。被災地に  
限らず、あと25年もすれば日本の人口は大きく減っ  
てしまう。全国的には「地方創生」に取り組み、さま  
ざまな施策を具体化する地域が出てきている。不安  
に思うのは、我々が復興に頭が行き過ぎて、ハード  
面だけを一生懸命に考えてまちづくりをしている点  
だ。被災地にとっては今が大変で、20～30年先の創  
生を考えられない。復興が終わった時に、よその地  
域に後れを取り、雇用や若年層の流出が懸念される。

**阿部 憲子** 沿岸部は定住人口が簡単には戻らないの  
で、交流人口の増加を意識するべきだ。宿泊業がけ  
ん引役にならないといけない。私どもは一つのホ  
テルに過ぎないが、震災後に被災した小売業の方が  
「店はなくなったが、ホテルに商品を納品します」と  
名乗り出てくれるようになった。観光業はすそ野が  
広いといわれるが、その通りだった。もっとがんば  
らなければならない。

交流人口を増やすには、インフラ整備が必要だ。  
東北は交通網の整備が不十分だったが、震災でさら  
に深刻になってしまった。高速道路も結ばれていな  
いし、鉄道や飛行機も未整備の地域が少なくない。  
交通網が整備されていないのに、交流人口を伸ばす  
のは簡単ではない。

**阿部 隆** 建設業の不安は、今の仕事量を100とすれ  
ば、5年もしたら限りなくゼロになることだ。1,000  
兆円もの借財を抱え、限られた国の予算で復興事業

を進めている。被災地は現在、(地域の中で)限りな  
く100%に近いインフラ整備を進めている。向こう5  
年くらいで整備が終われば、建設業は長いトンネル  
に入っていく。そう簡単に抜け出すことはできない  
だろう。

震災対応で国や行政に存在を認めてもらっている  
のに、また仕事がなくなり、建設業で働く人がいな  
くなったところに大災害が発生すれば、地域の建設  
会社が(復旧や復興を)手当することは難しくなる。  
宮城県建設業協会の佐藤博俊会長が言うように、



防災対策庁舎の周辺ではかさ上げ工事が(2015年10月27日)。

震災があったことを  
憂えるのではなく、  
「震災のおかげでよくなった。  
以前よりすてきになった」  
と言われるまちにしたい。



「地域の町医者」としての役割を考えた場合、我々は  
町民、県民にすぐ手を差し伸べられる存在でなければ  
ならない。「ものをつくる」観点から、「地域のサ  
ポート役」に回るにはどういう体制を組めばいいの  
か。既存のシステムではなく、地域を巻き込みなが  
ら、地域の一員として安全・安心をどう担保してい  
くかだ。簡単ではないが、絶対にやらなければならない。

**阿部 憲子** 震災後に印象に残っているのは、当ホテル  
に取材にきた外国人記者に「これほどの災害なのに、

どうしてこの建物はがんじょうなのか。日本の建築  
技術はすごい」と言われたことだ。その記者は中国の  
四川大地震も取材したが、「建物が豆腐のようだっ  
た」と話していた。そう考えると沿岸部の被災地は、  
日本の優れた建築技術を海外にお知らせする場でも  
あるのではないか。世界的に災害が多発しているの  
で、「命を守る学び」ができる。

これまでさまざまな問題点や困難に直面し、「1,000  
年に一度の災害は、1,000年に一度の学びの場でもあ  
る」と感じるようになった。ちょっとした差で尊い命  
が失われた。繰り返されてはならない。ほかの地域  
の方に「命を守る学び」にきてもらうことが、地域経  
済の活性化にもつながる。

また、少子化などに伴い、外国人を意識せざるを  
得ない時代だ。都市部だけでなく、地方にも外国人  
観光客にきてもらえるよう、国にインフラ整備や情  
報発信などの力添えをいただければありがたい。私  
どもはシティーホテルやビジネスホテルとは違う。  
温泉を楽しみ、浴衣を着て畳の生活様式を体験でき  
る。旅のキーワードは「非日常性」だ。世界中どの国  
でもホテルは均一的だと思うが、日本の旅館は特殊  
性がある。体験していただければ日本ファンの外国  
人が増える。

### まちづくりへの思い

**阿部 隆** 震災があったことを憂えるのではなく、  
「震災のおかげでよくなった。以前よりすてきになっ  
た」と言われるまちにしたい。このまちは漁業が第



南三陸の日の出。南三陸ホテル観洋から(2015年6月21日)。

一だ。漁業にタグボートになってもらい、農業や林業、観光業をけん引してもらわないと、まちが元気にならない。南三陸町の資源をどう最大限魅力あるものに変えて、どう世の中に広めていくのか。1人でも2人でも多くまちを訪れ、宿泊施設に泊まり、おいしいものを食べて、「きてよかった」と思ってもらえるようにしたい。

**阿部 憲子** 震災から1年くらい経った時に、住民の方が「遠くに親戚がいっぱいできたようだ」と話すようになった。一方、よそからくる人たちは「南三陸町は第二の故郷のようだ」と言ってくださるようになった。他の地域の人に「第二の故郷のようだ」と思っ

ていただくことは大切で、交流を意識したい。どんなに素敵なハードや素晴らしい建物ができても、心がないと生かすことができない。ハードもソフトも伴うようにして、豊かな

自然と共生するまちづくりができるとうい。

**阿部 隆** 我々もインフラ整備に携わりながら、地域のために、地域の人に喜ばれる「町医者」的な存在でありたい。大それたことはできないかもしれないが、かゆいところに手が届く存在であり続けたい。南三陸町のキャッチコピーは「きらりと光る南三陸町」だ。若い人の考えや力を取り入れながら、みんなで力を合わせてきらりと光るまちにしていきたい。

**阿部 憲子** 交流も大切だが、一方では地元が元気になる必要がある。震災時には地元の迅速な建設業の働きがあったからこそ、自衛隊も入ってくることができた。災害の初期対応では地元の動きが重要だ。建設業だけでなく、他産業でも地元が踏ん張り続けなければならない。チェーン店の看板ばかりでは、十分な復興とは言えない。

地元の方が誇りを持って根ざし続けられる地域でありたい。地元の方ががんばることで、地域の個性や特色も出てくる。東北のよさは人の温かさだ。そうしたよさを感じてもらえる地域にしていきたい。

(対談は2015年10月27日)



## 4. インタビュー 復興の先の未来へ

東日本大震災が発生した時、道路啓開やインフラの応急復旧が迅速に行われた背景には、信頼関係に基づく官民の連携があった。当時、国土交通省の東北地方整備局長として陣頭指揮を執ったのは、現在国土交通事務次官を務める徳山日出男氏だ。一方、宮城県建設業協会会長として、厳しい現場に出動する会員企業をまとめ、支援したのは佐藤博俊氏だ。リーダーシップを執った2人にあらためてインタビューした。

# 復興の先の未来へ

## インタビュー

災害の経験や建設本業の知識のすぐ外側で、地域の役に立つことがあるはずだ。

地域建設業には、そうした分野で持続性を確保し、いざという時に活躍できる基盤をつくってほしい。

徳山日出男氏

国土交通事務次官



東日本大震災の発生時には、国土交通省の東北地方整備局長として最前線で指揮を執り、東北自動車道などを軸に沿岸部に至る複数のルートを確保する「くしの歯作戦<sup>\*</sup>」を展開。地域建設業とも連携し、支援物資や救援部隊の輸送体制を迅速に回復させた。2015年7月から国土交通事務次官。岡山県出身。

— 震災からこれまでを振り返ってください。

**徳山** 東日本大震災は、大きく二つのことを印象づけた。1つ目は「巨大災害もくる時はくる」ということだ。500～1,000年に1回の巨大災害を経験し、「どう守ったらいいか」を意識した。想定外があつてはならない。これまでは、構造物で言えば設計震度などにあるレベルの想定があり、それ以上を守るとは経済的にも構造的にも合理的ではないので、考えないでおこうという気分があつた。だが、「ハードだけでダメなら、ソフトを使って逃げることで命を守ろう」という考え方に変わった。1,000年に1回クラスの巨大災害に対する気付きだ。

二つ目の気付きは「インフラや地域建設業は頼りになる」ということ。地域建設業が使命感で動き、命がけで闘って成果を上げたことを、世の中が認識した。私は(東北地方整備局長として)、震災当日の夜に「道路啓開をやらなくてはならない」と指示したが、災害協定を結んでいる地域建設業と連絡が付くかが最も心配だった。だが、一晩で52の道路啓開チームを組織することができ、地域建設業が素早い初動で、自衛隊やマスコミよりも早く道を開けた。画期的なことだった。

— 宮城県内の建設会社について、特に印象に残っていることはありますか。

**徳山** 実は、亡くなった方の数は、いつも津波に襲われてきた三陸地域(のある岩手県)より、宮城県の方

が多かった。人口の多い平野部の奥深くまで津波が入り、備えもできていなかったからだ。宮城の建設業の方は、多くの遺体と対面することになったはずだ。自衛隊やメディアの関係者にも、遺体を目の当たりにして精神的に追い込まれた方がいたのに、宮城の建設業の方は自ら口にすることがなかった。

黙々と対応したので、最初はテレビで取り上げられることもなかったが、地元の方や首長、市役所の関係者が見ていて、建設業の活動がじわりと知られるようになった。まるで有線放送からヒットした曲のように数年後に浸透し、みんなの心に残る働きをした。

— 被災地が抱える課題をどうとらえていますか。

**徳山** 被災地はこれまで、2011年の状態に戻す「旧に復する」作業が中心であつたが、現在では「あるべき未来に向かってどういう地域づくりをするのか」という視点に変わりつつある。震災前も東北は過疎や人口減少に直面し、どうやって生き残っていくかを模索していた。そのテーマは今も変わっていないし、さらに深刻化している。当時も今も課題である世界を、復興という作業の中でどう実現するかに気持ちも向いてきている。

ただ、地域ごと、市町村ごとに状況は違う。震災直後は、いずれも生活再建が課題だった。仮設住宅を建てる、災害公営住宅に移る、壊れた道路や堤防を直すなど、テーマが同じだった。今は、地域ごとに復興の進行度合いとテーマが違ってきている。個別の課題によって、未来を見る度合いが異なる。だ

今は、地域ごとに復興の進行度合いとテーマが違ってきている。個別の課題によって、未来を見る度合いが異なる。





地域建設業も同じだ。  
震災復興事業予算枠のある間は、  
精力的に仕事をしてもらわなければ  
ならないが、  
あるべき未来の姿を  
見通していく必要がある。

が、幸いなことに、震災復興事業予算枠は(2016年度から)さらに5年間認められる。その間に未来を見据え、悔いのないように地域づくりを進めなければならない。

— 地域建設業の役割をどうとらえていますか。

**徳山** 同じ建設業でも、地域建設業と全国ゼネコンでは初動の役割が全く違った。ゼネコンは直接重機を持っているわけでもないし、作業員の瞬時の動員力があるわけでもない。「くしの歯作戦」は最初の1週間で終了できたが、担ってもらったのは地域建設業だ。初動の段階の「地域を助ける」「命を守り生活を再建していく」という中で、地域建設業が果たす役割は大きかった。そういう意味でも、地域建設業を表す「地域の町医者」という言葉には、ぴったりの語感があった。

— 地域建設業のこれからの課題は何でしょうか。

**徳山** 地域について「未来を見据える方に視線が移ってきている」と言ったが、地域建設業も同じだ。震災復興事業予算枠のある間は、精力的に仕事をしてもらわなければならないが、あるべき未来の姿を見通していく必要がある。「平時も災害時も、地域建設業にはいてもらわないと困る」と認識されたのだから、永続性をどう保つかを真剣に考えてもらわなければならない。

「建設業」という名称だが、戦後のインフラがない時には建設することが一番のテーマだった。人手不足の中で、いかに建設本業の生産性を上げていくかは、現在も課題だ。(測量・設計から施工、管理にいたるプロセスを情報化して建設生産性を向上させ



東北地方整備局長として、陣頭指揮にあたる徳山氏(2011年3月)。

る)「i-Construction」も動き始めた。地方の中小建設会社ほど必要だと思う。

それと併せ、建設本業ではない世界で、どう仕事を確保するのか。比較的(本業に)近いところではインフラのメンテナンスの仕事がある。加えて、非常時に地域を守る立場で、非常時の避難方法を伝えていくといった活動も仕事にしてはどうか。点検もそう。インフラのメンテナンスとしての点検だけでなく、災害を考えた場合にこのまちはどうか、暮らし方はどうかなどを点検する仕事があってもよい。

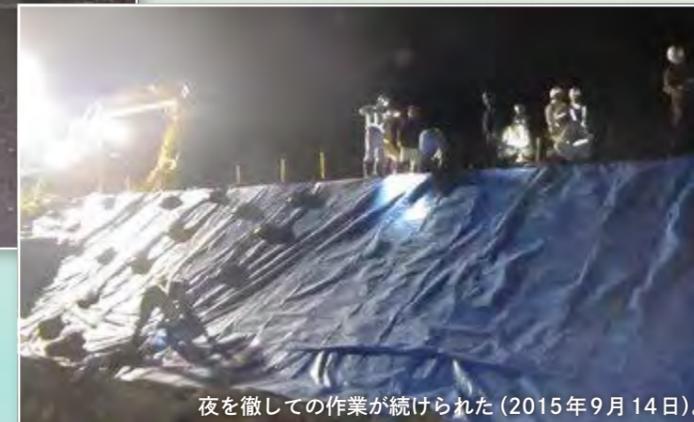
全く違う分野に進出する前に、災害の経験や建設本業の知識のすぐ外側で、地域の役に立つことがあるはずだ。地域建設業には、そうした分野で永続性を確保し、いざという時に活躍できる基盤をつくってほしい。

※くしの歯作戦：国道4号および東北自動車道から沿岸部に「くしの歯」のように道路を啓開し、救援・輸送ルートを伸ばした。震災翌日に11ルート、4日後に15ルートを開啓。1週間後には作戦を完了させた。

(インタビューは2015年12月16日)



破壊した渋井川(大崎市)での緊急対応(2015年9月14日)。



夜を徹しての作業が続けられた(2015年9月14日)。

2015年9月に発生した台風18号に伴う関東・東北豪雨災害。鬼怒川の氾濫による茨城県常総市などの浸水被害が印象的だが、宮城県内でも渋井川(大崎市)などの河川の越流・堤防決壊や国道4号(栗原市築館)の土砂崩れなどの被害が発生した。宮城県建設業協会では

すぐに対策本部を立ち上げ、東北地方整備局や宮城県とも対応を協議。会員企業153社が災害協定に基づき、延べ1,629人を出動させて緊急対応にあたった。

出動させた重機は、バックホウ、ホイールローダ、ブルドーザーなど延べ819台。迅速に応急復旧を行うとともに、避難所となった小学校に支援物資を提供するなどの活動を行った。地域建設業とし

## 関東・東北豪雨災害でも 災害協定に基づき 153社、1,629人が出動

て、東北地方整備局や宮城県、市町村からの要請に的確に応えた。東日本大震災の経験が生きている。



国道4号(栗原市)での土砂崩れの復旧作業(2015年9月11日)。



国道48号(仙台市青葉区作並)での緊急対応(2015年9月10日)。

# 復興の先の未来へ

## インタビュー

災害は  
これで終わりではない。  
最近、  
さまざまな自然災害が  
発生している。  
地域建設業が体力を  
付けておかないと、  
緊急時にふんばりが  
効かない。

佐藤博俊氏

宮城県建設業協会会長



震災発生後、すぐに協会本部に駆けつけ災害対策本部を設置。復旧・復興を着実に進めるため、各段階に応じて国や自治体に要望活動を行うなど、協会長としての重責を担った。宮城県体育協会会長も務める。「努力はするが評価は周りがする」が持論。「恩は着せるものではなく、着るものだ」とも。橋本店会長。仙台市出身。

— 震災からこれまでを振り返ってください。

**佐藤** 「地域建設業は危機管理産業であり、町医者である」と常々、言ってきたが、その責めをある程度果たしたと思う。大変な震災だったが、道路啓開に始まり、さまざまな緊急復旧工事やこれまで専門外であった土葬による仮埋葬、水産加工物の海洋投棄などを担ってきた。「遅れていると言われながらも、何とかここまで来た」という思いはある。県内の建設業界全体が宮城県建設業協会のもとで力を合わせ、対応してきた。十分だったかは周りが判断することだが、建設業の仲間としては「一生懸命にやってくれた」と思っている。

ただ、建設業界の努力だけでは解決しない部分もある。県内でも様々な地域事情により復興が進んでいる地域とまだまだ時間を要する地域が、まだらになっている。例えば、防潮堤の高さの問題もある。既に高台に移転した人もいるが、これまで通り(海のそばに)住み続けたい人もいて、防潮堤の高さについての民意が得られない。

— 現在の被災地の状況をどう見えていますか。

**佐藤** 以前から、「復興が遅れている」という見方があったが、東日本大震災の被害は岩手、宮城、福島3県の沿岸部に集中した。数百年をかけてできたまちを、(集中復興期間の最終年度である)5年目を迎えたからといって、元に戻すことはできない。地域によって復興の進み方は違うし、人の考え方もそれ

ぞれだ。見る立場や方向によっても評価は変わる。

国土交通省をはじめ発注者には、(資材価格や労務費の上昇に配慮して)工事費に復興係数、復興歩掛りを適用したり、労務単価を短期で引き上げたり、被災3県に特例措置を講じてもらった。ただ、少し復興ができてきたからといって、特例措置を止められると困ってしまう。特例措置があっても入札不調などの難しい問題が発生している。せつかく軌道に乗りつつあるので、あと数年は続けていただきたい。

— 地域建設業として、今後の課題をどうとらえていますか。

**佐藤** 震災後、会員企業はお金の問題を差し置き、自らの被害も顧みずに出動した。だが、既に5年が経過した。仕事をしたら採算が合うようにしなければならない。過去に大きな災害を受けた地域で、(復旧・復興が)終わった後に多くの建設会社が倒産した話も聞く。災害はこれで終わりではない。最近、さまざまな自然災害が発生している。地域建設業が体力を付けておかないと、緊急時にふんばりが効かない。

そのためにも、国には安定した当初予算の確保をお願いしたい。政権交代で公共事業予算が大幅にカットされたが、本質的に当初予算ベースでは元のレベルに戻っていない。地域建設業は体力がないので、予算の変動の波が大きく、急に忙しかったり、暇だったりすると経営が成り立たない。平準化して安定的に仕事を出してもらおうことが、地域建設業にとつ

「地域建設業は  
危機管理産業であり、  
町医者である」と  
常々、言ってきたが、  
その責めをある程度果たしたと思う。





震災後の段差解消にしても  
道路啓開にしても、  
どこが道路で川だか  
わからない企業がやれば、  
二次災害が発生する。  
わかるのは地域建設業者だ。

て長生きの秘訣だ。

— 建設業にとって地域の理解は重要です。地域との関係性をどう考えていますか。

佐藤 建設業は地域にお世話になり、地域に生きている。宮城県建設業協会として大相撲仙台場所に特別協賛したが、地域貢献活動も大事だ。20年程前には仙台市内で4～5日間も大相撲の巡業をやっていた。しばらくなかったが、今回は思ったより多くの地域の人が集まった。相撲は家族単位で楽しむことができる。においや音を含め、相撲を生で見る機会はなかなかない。多くの人がきて笑顔になってもらってよかった。

震災後、建設業に対する地域の評価はずいぶん変わった。震災後の段差解消にしても道路啓開にしても、どこが道路で川かわからない企業がやれば、二次災害が発生する。わかるのは地域建設業者だ。医者も以前のカルテを出してから診察する。能力の差はあっても、「地域の町医者」がいないと困る。

— 以前から「地域の町医者」という言葉を使っていますが、その役割はどうあるべきでしょうか。

佐藤 「地域の町医者」という言葉は、私が使い始めた気がする。宮城県建設業協会の会長に就任した時、「われわれ、地域建設業は町医者だ」と話した。大手ゼネコンは国立病院、大学病院であり、地域建設業は大手ゼネコンと競争するのではなく、違う土俵で共生するべきだという意味だ。

「地域の町医者」は、地域の地形、地象、実情に明るい特性がある。町医者として、地域に対し「あそこのおじさんは血圧が高い」「肺が弱いから肺炎になっているのではないか」といった感覚が求められる。そうした感覚での初期診療が後々まで影響する。選別を間違えて、大学病院に送るべき患者を設備が整っていない病院に送ってもダメだし、重病でない患者をよい病院に送れば、難しい病気の人が診てもらえなくなる。「地域の町医者」には、初期段階でそれぞれ(患者を)仕分けする意味もあると思う。(ゼネコンなどの)科学的、技術的に高度な対応は、時間を稼げば集まってくる。

(インタビューは2015年11月20日)



大島章宏国土交通大臣(当時)への緊急要望(2011年3月28日)。



宮城県教育委員会に防災教育用DVDと漫画冊子を寄贈した(2015年6月18日)



仙台市教育委員会にも同様に寄贈を行った(2015年7月1日)。

# 防災用 教育DVDと 漫画冊子を寄贈

宮城県建設業協会は、東日本大震災の経験を踏まえ、自主製作した防災教育用DVD「防災と減災」を、宮城県教育委員会および仙台市教育委員会に寄贈した。震災で得た教訓をビジュアルに子どもたちに伝え、いち早く避難するよう促す内容だ。復旧対応を経験した協会として、1人でも多くの命を救うには、子どもたちに避難の重要性を伝え

る必要があると判断した。寄贈したのは計3,000枚。併せて、震災時の建設業界の復旧対応を描いた漫画冊子「知られざる英雄たち」も寄贈した。



# 資料編

- 宮城県の子算額の推移
- 宮城県への復興交付金の交付可能額
- 宮城県内自治体への復興交付金の交付可能額
- 復興まちづくり事業の進捗状況
- 災害公営住宅の整備状況
- 宮城県震災復興計画と県内市町の震災復興計画策定状況
- 国全体の2016年度以降5年間の事業規模（見込み）

## 被災地では、

数十年分のインフラの整備・更新が一気に行われた。  
建設業の仕事はなくなるだろう。

だが、震災を経験したからこそ、  
わかったことがある。  
わかってもらえたことがある。

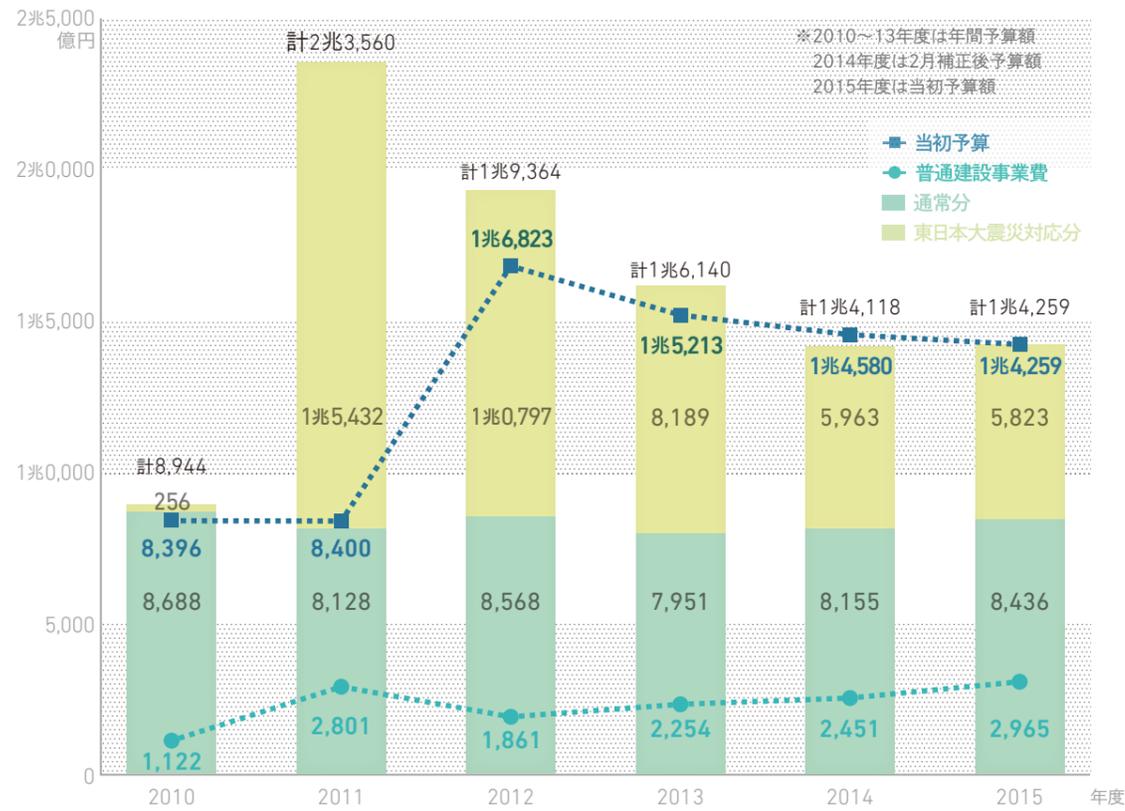
## 復興の先の未来へ。

「地域の町医者」として、  
これまで以上に役割があるはずだ。

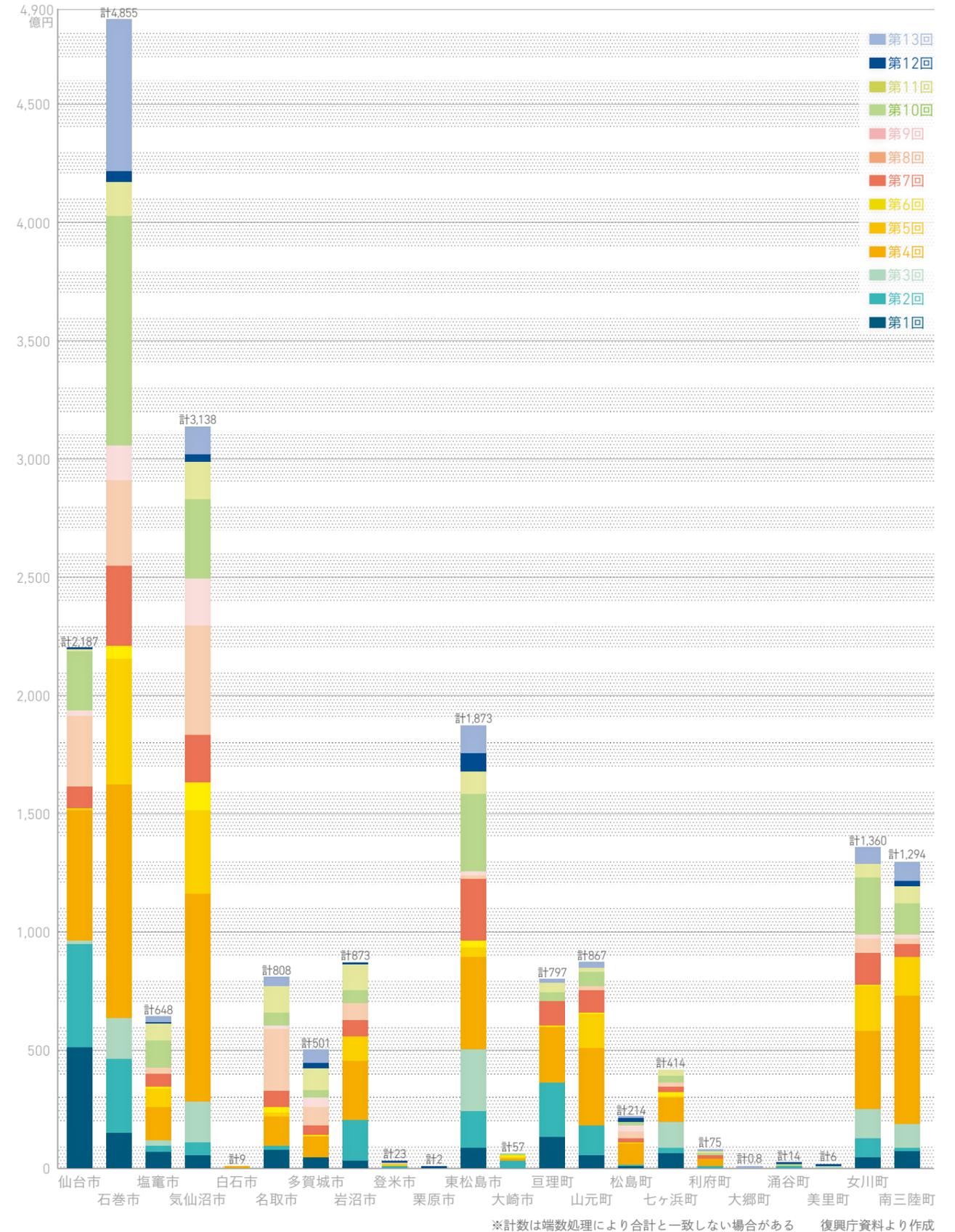
## 未来を担う若手技術者も育っている。

俺たちが先頭に立って、  
震災前よりよい地域をつくってみせる。  
そして地域を守り続ける。

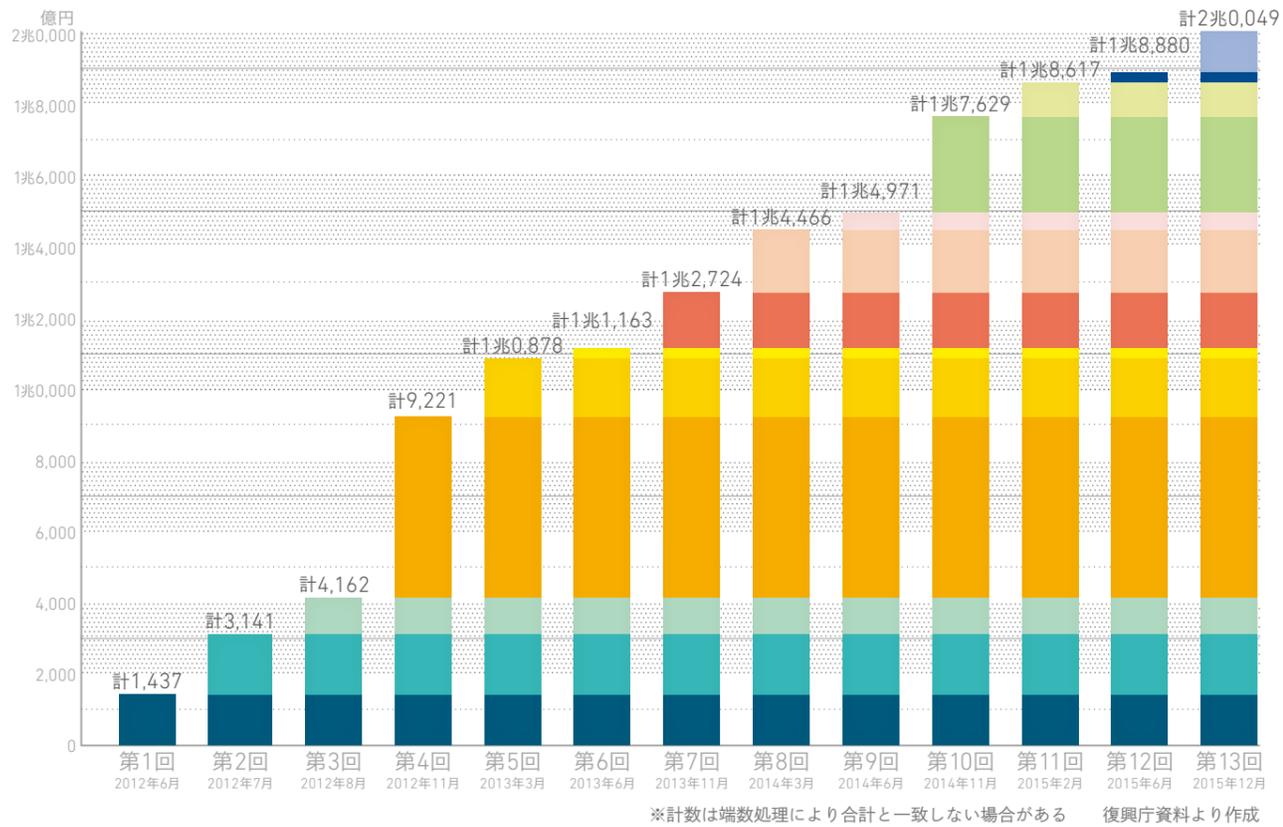
### 宮城県の子算額の推移 (一般会計)



### 宮城県内自治体への復興交付金の交付可能額 (事業費)



### 宮城県への復興交付金の交付可能額 (事業費)

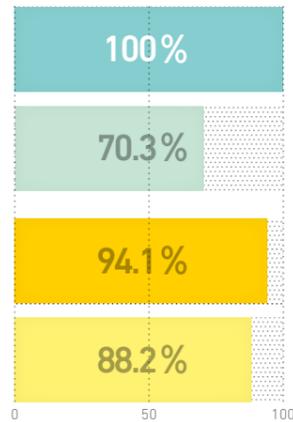


※計数は端数処理により合計と一致しない場合がある 復興庁資料より作成

### 復興まちづくり事業の進捗状況 (2015年11月30日現在)

#### 防災集団移転促進事業

計画地区数：195地区  
事業計画の大臣同意は全地区で得ている。

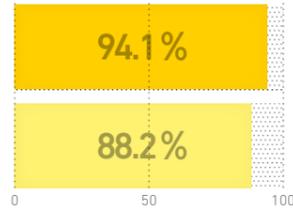


■ **工事着手 100%**  
造成工事着手等地区：195地区

■ **建築可能 約70%**  
住宅等建築工事可能地区：137地区

#### 土地区画整理事業

計画地区数：34地区  
都市計画決定は約94%の地区でなされている。



■ **事業認可 約94%**  
事業認可地区数：32地区

■ **工事着工 約88%**  
工事着工：30地区

### 市町別の防災集団移転促進事業、土地区画整理事業の状況

市町名	防災集団移転促進事業			土地区画整理事業		
	計画地区数	造成工事着手等(率)	住宅等建築工事着手(率)	計画地区数	事業認可(率)	工事着工(率)
仙台市	14	14 (100.0%)	14 (50.0%)	1	1 (100.0%)	1 (100.0%)
石巻市	56	56 (100.0%)	36 (64.3%)	14	14 (100.0%)	12 (85.7%)
塩竈市	2	2 (100.0%)	2 (100.0%)	2	2 (100.0%)	2 (100.0%)
気仙沼市	51	51 (100.0%)	33 (64.7%)	3	3 (100.0%)	3 (100.0%)
名取市	2	2 (100.0%)	1 (50.0%)	1	1 (100.0%)	1 (100.0%)
多賀城市	—	—	—	1	1 (100.0%)	1 (100.0%)
岩沼市	2	2 (100.0%)	2 (100.0%)	1	1 (100.0%)	1 (100.0%)
東松島市	7	7 (100.0%)	6 (85.7%)	5	3 (60.0%)	3 (60.0%)
亘理町	5	5 (100.0%)	5 (100.0%)	—	—	—
山元町	3	3 (100.0%)	2 (66.7%)	—	—	—
七ヶ浜町	5	5 (100.0%)	5 (100.0%)	4	4 (100.0%)	4 (100.0%)
利府町	—	—	—	—	—	—
女川町	22	22 (100.0%)	11 (50.0%)	1	1※ (100.0%)	1※ (100.0%)
南三陸町	26	26 (100.0%)	20 (76.9%)	1	1 (100.0%)	1 (100.0%)
合計	195	195 (100.0%)	137 (70.3%)	34	32 (94.1%)	30 (88.2%)

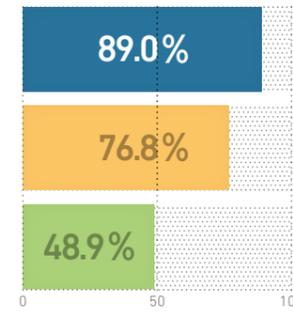
- ・造成工事着手  
工事請負契約の締結等が完了したもの。
- ・住宅等建築工事可能  
土地を購入又は借地し、住宅を建てられる準備が整った状態のもの。
- ・事業認可  
事業計画が知事の認可を受けたもの。
- ・工事着工  
事業認可後、地元調整や工事契約手続が完了し、施工業者が区画整理事業用地内の工事に着手したもの（伐採や搬入路等の準備工も含む）。

※女川町は事業認可を4カ所取得しているが、1地区として計上

### 災害公営住宅の整備状況 (2015年11月30日現在)

#### 災害公営住宅

計画戸数：15,924戸



■ **事業着手 約89%**

設計業務等に着手したものの着手戸数：14,116戸

■ **着工 約77%**

建設工事に着手したものの着工戸数：12,224戸

■ **完成 約49%**

完成戸数：7,784戸

### 市町別の災害公営住宅の整備状況

市町名	計画戸数	事業着手戸数		工事着手戸数		完成戸数	
		進捗率	進捗率	進捗率	進捗率		
仙台市	3,179戸	3,179戸	100.0%	3,179戸	100.0%	2,760戸	86.8%
石巻市	4,500戸	3,437戸	76.4%	3,388戸	75.3%	1,667戸	37.0%
塩竈市	420戸	420戸	100.0%	390戸	92.9%	110戸	26.2%
気仙沼市	2,139戸	2,138戸	100.0%	1,321戸	61.8%	438戸	20.5%
名取市	716戸	409戸	57.1%	92戸	12.8%	92戸	12.8%
多賀城市	532戸	532戸	100.0%	482戸	90.6%	208戸	39.1%
岩沼市	210戸	210戸	100.0%	210戸	100.0%	210戸	100.0%
東松島市	1,010戸	831戸	82.3%	831戸	82.3%	574戸	56.8%
亘理町	477戸	477戸	100.0%	477戸	100.0%	477戸	100.0%
山元町	490戸	490戸	100.0%	402戸	82.0%	363戸	74.1%
松島町	52戸	52戸	100.0%	52戸	100.0%	52戸	100.0%
七ヶ浜町	212戸	212戸	100.0%	212戸	100.0%	138戸	65.1%
利府町	25戸	25戸	100.0%	25戸	100.0%	25戸	100.0%
女川町	864戸	655戸	75.8%	305戸	35.3%	230戸	26.6%
南三陸町	738戸	738戸	100.0%	522戸	70.7%	104戸	14.1%
登米市	84戸	84戸	100.0%	60戸	71.4%	60戸	71.4%
涌谷町	48戸	48戸	100.0%	48戸	100.0%	48戸	100.0%
栗原市	15戸	15戸	100.0%	15戸	100.0%	15戸	100.0%
大崎市	170戸	170戸	100.0%	170戸	100.0%	170戸	100.0%
大郷町	3戸	3戸	100.0%	3戸	100.0%	3戸	100.0%
美里町	40戸	40戸	100.0%	40戸	100.0%	40戸	100.0%
合計	15,924戸	14,116戸	89.0%	12,224戸	76.8%	7,784戸	48.9%

※2017年度までに整備予定

## 宮城県震災復興計画

宮城県は2011年度から2020年度までの10年間における「宮城県震災復興計画」を策定した。

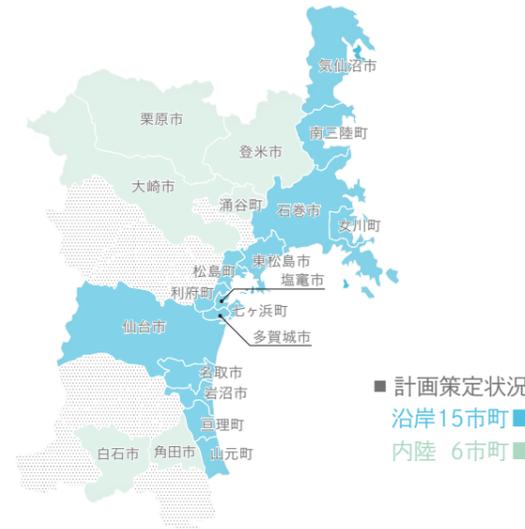
- ①被災者支援を中心に生活基盤や公共施設を普及させる「**復旧期**」
  - ②直接の被災者だけでなく、震災の影響により生活・事業等に支障をきたしている方々への支援をさらに充実していくとともに、宮城県の再生に向けたインフラ整備などを充実していく「**再生期**」
  - ③県勢の発展に向けて戦略的に取り組みを推進する「**発展期**」
- を設定していて、2016年度は再生期の3年目に入る。



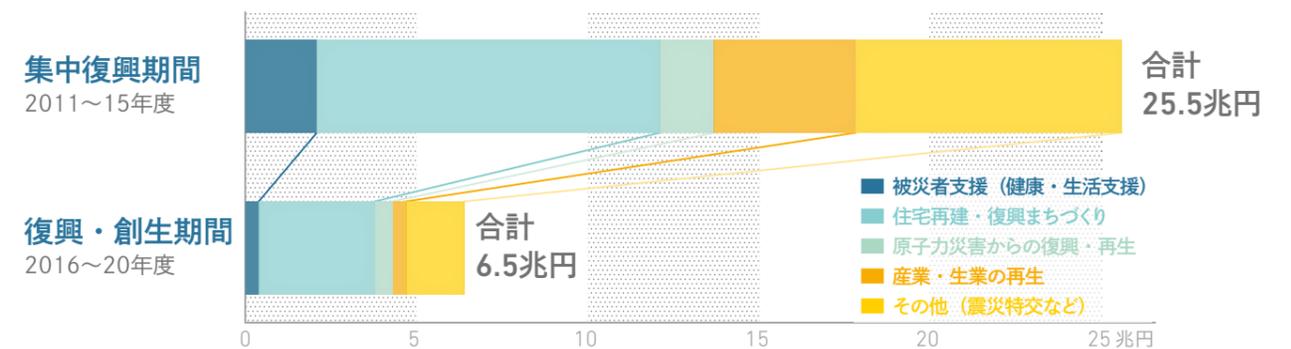
## 県内市町の震災復興計画策定状況

市町村	策定期期	計画期間	「減災」に関わる事業
仙台市	2011年11月	2011～15年	多重防御、集団移転
石巻市	2011年12月	2011～20年	多重防御、集団移転
塩竈市	2011年12月	2011～20年	防潮堤の整備、幹線道路に堤防機能を付与、避難路の整備など
気仙沼市	2011年10月	2011～20年	集団移転、避難ビルを併設した高層階への居住
名取市	2011年10月	2011～17年	集団移転、多重防御、避難場所の確保など
多賀城市	2011年12月	2011～20年	多重防御
岩沼市	2011年8月 (2013年9月改定)	2011～17年	多重防御、集団移転、避難場所の確保など
東松島市	2011年12月	2011～20年	多重防御、集団移転、避難場所の確保など
亘理町	2011年12月	2011～20年	多重防御、集団移転
山元町	2011年12月	2011～18年	多重防御、集団移転
松島町	2011年12月	2011～15年	防潮堤のかさ上げ、避難路の強化など
七ヶ浜町	2011年11月 (2014年3月前期計画更新)	2011～20年	多重防御、集団移転
利府町	2011年12月	2011～16年	避難場所の確保など
女川町	2011年9月	2011～18年	集団移転、避難場所・避難ビルなどの整備
南三陸町	2011年12月	2011～20年	集団移転、避難路や避難施設の整備

市町村	策定期期	計画期間	「減災」に関わる事業
白石市	2011年9月 (2012年10月修正)	2011～17年	
角田市	2011年8月	2011～15年	
登米市	2011年12月	2011～15年	
栗原市	2011年12月	2011～21年	
大崎市	2011年10月	2011～17年	
涌谷町	2012年3月	2011～20年	



## 国全体の2016年度以降5年間(復興・創生期間)の事業規模(見込み)



区分	集中復興期間(2011～2015年度)	復興・創生期間(2016～2020年度)
被災者支援(健康・生活支援)	2.1	0.4
住宅再建・復興まちづくり	10.0	3.4
原子力災害からの復興・再生	1.6	0.5
産業・生業の再生	4.1	0.4
その他(震災特交など)	7.8	1.7
合計	25.5	6.5

(単位:兆円)



あれから5年 復興の先の未来へ  
3.11 東日本大震災  
宮城県建設業協会の闘い 4

平成28(2016)年2月

発行 一般社団法人 宮城県建設業協会  
〒980-0824  
仙台市青葉区支倉町2番48号  
宮城県建設産業会館6階  
電話 022-262-2211 FAX 022-263-7059  
E-mail jigyo@miyakenkyo.or.jp  
URL <http://www.miyakenkyo.or.jp>

編集・制作 日刊建設工業新聞社

写真協力 水本 圭亮

印刷 平河工業社



## 訂正

本文33頁の右上の写真と絵解きに誤りがありました。  
以下のように訂正します。



木村土建が手掛ける大曲浜の防潮堤の復旧工事。